

親切（論文集）

近藤良樹

目次

- 第一章 我々の親切は、誰にするのかー日本的な親切の人間関係論ー
（補） **The Theory of Kindness from the Viewpoint of Japanese Human Relations**
ーWhom Are We Kind to?ー
- 第二章 親切な人とは、どんな他人かー人間関係としての親切論ー
- 第三章 親切心ー他人に対するあたたかな思いやりー
- 第四章 親切の本質ーたまたまにする、ささやかな手助けー

「キーワード」 親切, 思いやり, 同情, 好意, 善意, 世話, お節介, 他人,
kindness, gentleness, sympathy, benevolence, family, others

第一章 我々の親切は、誰にするのかー日本的な親切の人間関係論ー

1. 親切は、ひと（人）にする

われわれの「親切」は、困ったり求めをもつ他人に対して、たまたまその場に居合わせる者が、ささやかな手助けをすることである。こう定義される親切は、英語では kindness になり、ドイツ語では Freundlichkeit になる。親切は、日本においては、事物にするものでも、動植物にするものでもない。人間に、「ひとに親切にする」のである。ときに酔っぱらいは、街路樹にぶつかりそうになって、これに「親切に」注意をする。だが、かれも、それが街路樹だと気づいたときには、「人の邪魔をして」と蹴り上げて、親切の気持を抱いた自分の非を行為で示す。

われわれの親切と異なって、英語では、しらふでも、草木にも「親切にkindly」する（この事情はドイツ語の freundlich でも同様のようである）。親切の気持ちをいなく範囲が、日本とは異なる。kind (freundlich) は、「親切」とは違い、草木にも動物にも言い、「優しさ」のように広い範囲に関わる。ならば、kind とは、「優しい」ことであり「親切な」ことではないのであろうが、しかし、われわれの「親切」に相当することばは、kindness であり、kindness の中核は、やはり、われわれの「親切」と同じであるように思われる。日本に「小さな親切運動」があるが、それにほぼ均しいものがアメリカでは“kindness movement”と称して展開されている。これは、草花をめぐるのも動物を愛護する運動でもない。この kindness の対象とするものは、われわれの親切と同じく人間である。

日本では、足に毛糸がからみついて困っている猫を助けるのは、親切とはいわない。「猫に優しくする」にとどめる。動物とひとを本来われわれは、西洋のひととちがひ、あまり区別しないのだが、親切に関しては、動物をその対象から外す。おそらくは、猫や犬が、ひとの親切を理解せず、「いらぬお世話を！」という目つきをして逃げるからであろう。

（親切の理解できる者に親切はする）ひとに親切にするのであるが、さらにわれわれの親切は限定的であって、人であっても死体には親切にしない。病室で「隣の病人が車椅子にのるのを、親切に手助けしてあげた」というけれども、後にこれを棺おけに入れることになっても、「その死体の足をさげて親切に入れてあげた」とはいわない。そうであるのみか、われわれは、生きている者でも乳幼児や植物人間にも、「親切」にはしないのではないか。

「同情」なども、死んだ者にはしない。おそらく、植物人間にもしない。植物人間になった友人の見舞いにいって、「同情しました」とあとで感想をもらす場合、だれに同情しているのか。植物人間の友人にではない。その友人には痛恨のなみだをながし哀れみ悲しんだとしても、「同情」はしない。「同情する」その相手は、友人の家族であろう。父の葬儀に親戚が集まったというので喜んでる幼児にも同情はしない。だが、親切を犬猫にまでいう英米では、やはり犬猫にも死体にも幼児にも「同情 (compassion, sympathy)」する。

われわれが同情や親切をこれらのものにしないのは、同情の場合、「同」「情」するのであるから、自分の「情」と「同じ」ものをもっていることが前提されるのであろう。死んだものには、「情」はなくなっている。植物人間もそうである。親切もそれに類した思いがあるのではないか。つまり、親切をするその相手が、自分と同じように、親切を親切として「理解できる」ことを前提にするということである。草木はもとより犬猫にも「親切」をいわないのは、それらがわれわれの親切を「親切」として理解してくれないからであろう。

（われわれの親切は、相関的）親切は、「余計なお世話」「お節介」とみなされることもある。よけいな世話と解される親切は、親切ではない。ひとりよがりの親切は、迷惑千番である。相手から「親切」と理解・受容されてはじめて、親切である。いくら純粹に一途に「愛」していたの

だとしても相手が嫌がっていた場合は、「セクハラ」であり、「暴行」になるのと同じである。ひとを思う優しい(kind)気持があっても、独善的な親切では、親切(kind)にはならない。相手から親切として受けとめられる必要がある。親切は、相手次第である。やさしいわれわれは、その相手をしっかりと見ていて、それに応じて、親切になったり、優しくなったり、ていねいになったりするるのである。

交わる対象に応じて、われわれは、微妙に態度を変える。第一人称が一つ(英語なら I)のぶっきらぼうの欧米とちがい、相手に応じて「わたくし」「おれ」「おとうさん」等と変わることで通じるものがありそうである。「私」や「僕」は、よそ行きの私であり、友だちの前では「おれ」「わし」となる。わが子のまえでは「お父さん」となる。相手にあわせて、われわれの自己は決定される。非自立相関的である。どこの人類でも、もともと群居の哺乳類のこと、相関的に自己も存立しているはずであるが、その相関の度合いが、われわれでは大きい。よく言えば、気遣いがこまやかなのであり、悪く言えば、独立心・主体性に乏しいのである。

kindnessの国々では、自主自立の個人主義が強く、ひとがどうしていようがわれわれほどには気にせず、自己は、どこで誰に面していようとも、不変の「私(I)」を貫く。その自主独立の根本の態度が親切でも出てくるのであろう。相手が親友であろうと、生きていようと死んでいようと、犬猫を前にしようと、気にすることはない。一貫した不変の「親切な私(I)」が、自信をもって親切を貫いていくのである。

2. 親切は、ひと(他人)にする

われわれは、犬猫にではなく「ひとに親切にする」のであるが、さらに限定的で、その「ひと」というと、日本では、「他人(ひと)」になる。自分の家族には親切は言わない。kindnessの国では、犬猫のみならず家族にも親切にする。ドイツの親切(Freundlichkeit)も家の内外を問わない。個人主義が徹底しているので、各個人にとっては、家の内外の別は、大した違いではないものようである。われわれ日本の場合が特殊なのであろうか。家族とその外との仕切りが、われわれでは大きい。そとでは人一倍親切で同情する人であっても、家族には同情もしないし親切にもしない。「こどもに、親切にしていた」と聞くと、そのこどもは、他人であると知ることができる。同情でもそうである。「わが子に同情する」ような親は、親ではない。

では、なぜに、親切や同情を家族にいわないのであろうか。手助けや思いやりということでは、家族も当然その対象となる。違いは、家族は一心同体的な存在なので、特別な深い関わり方になることである。家族の困っていることでは、単なる小さな親切にはとどまれない。これには、親切を超過して献身的となる(受難への同情も同じで、家族では、傍観者の同情にはとどまらず、距離をなくして受難の当事者になってしまう)。西欧でもそれは似通ったものであろう。われわれ日本人は、この、家での特別のあり方をそれとして区別して、そとでの親切(あるいは同情)を

うちにはいわないのではないか。

親切は、たまたまの出会いに、余裕でする、ほんのささやかな手助けである。親切は、本質的に、「小さな親切」である。だが、日本の家庭では、自己犠牲的な献身は当たり前で、親たちは、いふなら超親切的な毎日である。余裕にするささやかな手助けの親切で形容できるような、なまやさしいものではない。このような超親切的な深い愛にそまった深紅の家族のうちでは、ささやかな薄紅の、ほんのり温かな親切は、色をうしなう。見えなくなる。

親切は、他者距離を保って、ほんの表面のごくささやかな援助をするにとどめる。他人であることを超えて踏み込んではいない。むしろ、薄紅の好意にとどめるのが、親切である。他人としての遠慮をしなくてはならない。深紅の濃い愛をささげるのは、非常識で、迷惑ともなる。ささやかな手助けのみのつもりで、若い女性が、見も知らずの親切な男性に重い荷物を少し運んでもらったのに、彼から深紅の愛をもって「どう、今夜は一緒に…」とあたかも妻に接するような超親切的な誘いを受けるのでは、親切は、ぶちこわしとなる。

家族では、深紅の超親切が原則であるが、例外的に、他人行儀になっているときには親切や同情をいうことがある。深紅に染まっていない他人行儀な白紙状態のところでのみ、薄紅は見えてくる。パソコンにてこずっている父親が、息子に対して「もおちよつと、親切に教えてくれにゃあ、分かるもんきゃあ！」と苦情をいう。パソコンに関しては、両者は、別世界にいるのであり、あたかも他人であるかのような場面に出くわしているわけである。ここでの父親の不満は、別世界の他人同士のような状態なのに、接し方は、むしろ、他人に対するような遠慮とか敬意を表すことがなく、親を小馬鹿にしていることである。他人にするように、よい意味で距離をとり遠慮をして、他人に教えるときのように、忍耐・寛容・優しさのころもって、つまりは「親切」で接してくれと不平を言っているのである。

(通りすがりの他人にする) 親切は、たまたまに出合った他人の間でするのが典型であろう。親切と似かよった、無償の手助けであるボランティアと費やす時間は変わらなかったとしても、両者は、区別される。ボランティアは、計画的で、本格的な仕事であり、手助けの必要なところには地のはてまでも駆けつけていく。だが、親切は、しなくてもどうということのないもので、たまたま生じた困惑に対して、その場に居合わせた通りすがりの他人が(従って、通りすがりの他人に)即興にささやかな手助けをするのである。

親切は、その同じ場にいることを前提とする。ほんのささやかな手助けなので、偶々に隣りあわせた赤の他人に頼めるのである。遠方からわざわざに呼ぶことはない。沖をゆったりと航行している巨大タンカーを岸边にと手招きして引き寄せ、「こらでキャンプをしてもいいと思いませんか」と親切を請う者には、親切を請えるのがだれになるか、船員たちがその逞しい腕をもって体に覚えさせてくれることであろう。親切は、単に他人にするというのみでは不十分であって、たまたま同じ場所に居合わせている行きずりの他人に限定されることになる。友人にする親切は、

嫌われたくない等の不純な動機をもつ。純粋な親切は、行きずり、通りすがりの他人にする親切である。

3. 親切は、困っているひと、求めのあるひとにする

親切は、ささやかな無償の手助け・援助を、他人にすることである。だが、ならばと、近所のポストに小銭をなげいれてまわったり、たまたま同席した旅行者に、まといついて観光案内をするのは親切であろうか。当人は「いいことをして、気持ちがいい…」と親切のつもりであっても、相手には、迷惑であり、「余計なお世話」である。その自称の親切は、場合によるとハラスメントであり、「犯罪」となる。親切にするその他人は、何か困っているのではなくてはならない。相手が困っていること、求めていることをしっかりと確かめてから親切にするものである。

親切は、必ずしも困るまでになっていなくても、その親切の贈与をありがたいと思える、それを求める気持のあるところにも通じる。そのことへの意思・欲求つまり「求め」があるところで、困る手前において、これに答えていくのである。コーヒーをいれていて、ついでに、喜んでくれそうなひとにも作ってあげるのは、親切であろう。困っていたり、求めのあることを察して、これに答えるのが親切である。

（「小さな親切」ですますが、親切）困っている、求めているといっても、その客観的な困窮度が大きい場合は、親切の対象とはならない。厳密にいうと、親切にされる者にとっての主観的な困窮度は大きいものでもかまわないが、親切にする者には、これに答えるに小さな手助けにとどまるのではなくてはならない。ささやかな困惑にささやかに答えるのが親切の一般である。

親切にするのは、しばしば赤の他人である。そんな見も知らずのひとに、駅前で、「借金で困ってます、お願いします、50万円下さい」と請われたからといっても、親切にする者はいない。このお願いは、「冗談」か、「聞きちがい」か、でなければ、「恐喝」と受け取られることになる。親切のかかわる困窮・求めは、親切にする者にとって、対処するに、ささやかなもので済むのではなくてはならない。

家族には負担の大きいものでも無理をして超親切に答えていく。年寄りに「オレ、オレ」と孫が電話で泣きつくと50万や100万ならすぐにも銀行に振り込んでくれる。それが新聞で犯罪として問題になるのは、その「オレ」が他人であった場合に限られる。われわれは、他人には冷たい。他人にするものとしては、援助は、ほんのささやかで負担にならないものに限定する。これがわれわれの親切である。

道をたずねられたら、「あっちですよ」というだけで放置するのが親切で、「ご一緒しましょう、どこのお宅に何のために、お出でなんですか」というのでは、くどくなる。ましてや、「一緒にいきましょう、今日は暇ですから。夜は一緒に食事して…」と超親切になることを、親切にされるひとは、求めない。他人同士であることにと自制し遠慮しあって、ささやかにのみ触れ合うのが

親切のマナーである。

困っている者、求めのある者に親切はするのだが、困っているかどうかは、主観の問題であり、外見からは分からないことが多い。相手が「困っている」と表現すれば、これは、確かである。道を尋ねるとか、パソコンの「ここところが分からない」というような場合である。これにこたえるのは、百パーセント、親切と評価され、喜ばれる。だが、ひとは、むやみに困苦をそとに表現するものではない。自分の評価にかかわる問題であったとすると、隠してひとり悩むことになる。親切は、この場合、困苦そのものの発見からはじまる。

表面的には、困っているひと・求めある人と、そうでないひとの区別がつきにくい。いずれも、こまっていない、求めていないとの装いをしている。この隠れた困苦や求めの発見は、それだけで、そのひとへの親切となるぐらい、当人には、ありがたいものとなる。しかし、ふつうの人と比較してみても明らかに困窮した生活なのに、当人は、そうは思わず、清貧に誇りをもって生きているということもある。そういうひとに親切の申し出をするのは、おそらく「いらぬお節介」となる。また、本人が欲していたとしても、余計なことになる場合もある。たばこを欲しそうにしているのを見て、「一本どうぞ」と親切にしたとしても、そのひとが禁煙の最中だったとすると、「余計なお世話」である。

親切の過剰は、その相手には、いらぬお節介で迷惑となる。ここでは、親切をやめることこそが親切になる。場合によっては、親切の過剰は、親切を頼りにするパラサイト（迷惑者）をはびこらせることもある。登山に際して予備の食料をもたず、少し困るとヘリコプターを呼んでみたり、雨が降りそうでも傘を持参せず、ひとの傘を頼りにする寄生虫的存在者をつくる。こういう者の困惑や求めには、不親切にしておく方が長い目では親切となる。

4. 親切は、(困っていても) いやな者には発動しない

困っていたり、求めのある他人に親切はなされるのだが、親切にされる人は、それでよいとしても、他方では、親切にする者の意向というものがある。親切にするのもしないのも親切な人の自由である。親切は義務ではない。善意・好意で自発的にする任意の贈与である。困窮しているとしても、嫌いな相手には、親切にはしたくない。親切の気持ちを逆なでするような相手の対応がある場合は、親切心は萎縮する。

嫌いな者とは、遠ざけたい者であるから、親切に近づくことには抵抗したくなり、親切は、発動しにくい。嫌いな者でも、困っているから助けて欲しいといえ、嫌いな程度と、その援助の内容しだいでは、親切にしようが、わざわざ、その求めているものを推測し気を配って、親切にするようなことは、しないであろう。だが、好きな相手には、近づきたいし、贈与的になるので、よく気をつけ親切を連発したくなる。

憎悪する相手になると、これには懲罰を加え、これを抹殺したいのであって、親切の贈与など

とんでもないこととなる。「舌切り雀」の欲張りばあさんに対するように、懲らしめとなるようなものを背負わせたくないことはあっても、価値あるものの贈与は拒絶することであろう。親切は、ささやかな手助け、小さな贈与だとはいえ、相手のプラスになることにはまちがいなく、いくら相手が困っていても、求めているも、憎悪する相手には親切は発動しない。「敵意」をもったり、「悪意」をもつ場合も、同様である。親切は、価値あるものの贈与であり、反価値の付与を意図する悪意に反する。敵に親切にするのは、利敵行為となる。

(親切は、好意をもてるひとにする) 親切にする相手は、困っていたり求めをもつ他人であるが、さらには、親切にするひとの方が、敵意や悪意をもっていないひとということになる。積極的に、好意をいただけるひとに、親切心は向けられる。相手のプラスとなることを望んだり、近づきたいと思っているような場合、つまり好意の気持をさそわれるならば、親切もさそわれることであろう。ただし、親切が請われるのは、駅頭で道を突然たずねられるときのように、たまたまのことであり、見知らぬ他人からであることが結構ある。「交番は、どっちですか」と聞かれ、とっさに「ここを出てすぐ左です」と反応する。その相手について、好きとか嫌いとかの判断をする前に、親切は終わる。だが、そういう場合でも、強く不快感を与えるような装いの相手には、親切心は発動しない。それをこころえているから、たとえ茶ばつ等で不快感を与える若者でも、「おい、そこのはげのおっさんよお！」と私に呼びかけるのではなく、頭をぺこぺこさげながら、にこやかに好意的に受け取られるようにと努力しつつ、「ちょっと、すみませーん、交番を教えてください」と尋ねるのである。

親切は、積極的に、すきな相手に向けられる。すきで、ちかづきたいということであれば、ささやかな贈与・手助けの親切は、それを満たす機会として誘発される。「好意」は、関わる他者に親しみをいただき、これを好きだと感じることである。是認的で、その悪をも肯定的にうけとめようとし、あたたかく優しく思いやりある態度を持って、これに近づきたい、近づけたいと思い、そのひとのためになることをしてあげたいと、贈与的になった心構えであろう。

好意の相手は、他人である。好きで親しみをもち贈与的であっても、我が家のものには、「好意的」にふるまうとは言わない。好意を超えているからである。われわれの好意は、家族のそとの、他人に向けていだかれる、他者距離を維持した、ささやかな薄紅の愛である。

(「善意」や「慈しみの心」から発動する親切もある) 「善意」は、反悪意として、相手のためになる善いことを願っている。相手を肯定的によい方に理解し、その人のためになる善いことをと利他的贈与的な気持をもつものである。善意の親切がさそわれる相手は、好意の相手とちがって、社会的な弱者など、むしろ、価値あるものを喪失して受難状態にあるひとの方に傾く。これも、他人に対して発動する利他の意思である。家族には、良かれと思ってするのは当たり前で、家族は相互にもう一人の自分であり、傍観者には留められない。善意も好意も、傍観者の位置にとどまりつつ他人に対して抱くものになる。

好意は、善意より主観的で、相手のことを好きで、好ましく思い、親しみをいだいて、近づきたいという、引かれる契機が顕著である。好意の親切は、好きな者に向けられる。善意は、そういう引かれるとか好きだということは問題にしない。善意は、善いことを願う冷静な意志が中心になる。善意の親切は、慈悲心からする親切もそうだろうが、真に手助けの必要な受難者・弱者にと目をかけ、ひいきする。

5. 近づきたい他人を選んでする親切もある

(下心をもつての親切) 親切は、見知らぬ他人に近づける絶好の機会なので、その手段として利用される。手段としての、いわば「下心のある親切」は、「善意」や「慈悲」からの親切と違って、社会的弱者をむしろ除外し差別する。「下心ある親切」は、親切が目的ではなく、下心が主で、親切は単なる手段・えさである。

親切は、無関係の他人に怪しまれずに近づき、わずかな負担で、おおきな獲物をものにできる機会となる。故意に、下心をもつて関わりをねらっていたのに、自分がたまたま居合わせて手助けをすることになった、相手の方から関係が求められてきたととぼけることができる。

もともと親切は、たまたまの出会いに、見知らぬ他人がしてくれるのだから、無関係のものが親切にしてくることに、疑問をいだくことは少ない。軽い他者間接触であり、貸し借りの意識もさしてもつ必要もなく、受け入れやすい。しかも、親切心をもって、つまり善意で好意的にひいきしてくれているのである。ひとの好意・善意は、断りにくい。それを見越して、下心あるものは、親切をたくみに利用していく。

親切の悪用としては、「親切ごかし」もある。親切ごかしは、親切に相手の手助けをし、贈与的利他的に見せかけながら、その実、自分の利益を追求していることをいう。「猿かに合戦」の猿が、かのために青い柿を取ってやったようにである。

下心のある親切の「下心」は、親切の場面には見えず隠されていて、犯罪的意図までをふくむが、親切ごかしの場合は、自分の利益の優先をその親切自身において見せる。親切の度合いからいうと、下心をもつてのそれは、「赤ずきんちゃん」へのおおかみの親切のように、過剰なぐらいに贈与的である。親切ごかしは冷淡で、青い柿をなげつけた猿のように、親切の贈与の少なさによって、おのれを露呈する。

(手段としての親切の相手) 親切は、困っていたり求めをもつ他人にする。下心ある親切や親切ごかしは、さらにその他人を限定していく。「赤ずきんちゃん」のおおかみは、森で木こりが困っていたり、男の子が道に迷って泣いていても、親切にはしない。それらを見越して、ひたすらに、赤ずきんちゃんのみにと親切の対象を限定する。それは、彼女のみが自分の目的とするものを満たしてくれるからである。自分の求めを満たしてくれる相手にと限定して、親切の相手を選択するのである。

親切ごかしの、「猿かに合戦」の猿にしても同様である。困窮している無産の蟹どもに親切をしようとはしない。柿の木の所有者である蟹にのみ親切にしていく。自分の欲しいものを充足してくれる相手にと限定しての親切である。下心ある親切も親切ごかしも、親切にする相手の困惑や求めに応じていくのではあるが、その真の目的は、他人への手助けではなく、自分の欲望の充足である。つまりは、「自分に親切にする」のだということができなくもない。

(隣近所との親切の交換) 親切は、たまたまとなりあった他人にするが、この隣りが固定するときがある。隣近所である。隣近所と親切にしあうのも、単純に親切をするというのではなく、別の意図(下心)あつてのものである。好意的であつて敵意や悪意はもっておらず、穏やかな隣同士でいたいこと、ぎくしゃくした関係にはなりたくないことを、親切をもって表示しあうのである。好意や親切は、他人を対象とし近すぎず離れすぎず親しみあい、ほどよい隣近所との関係をつくりだす。これも下心があるのだといえ、いえる。たまたまに隣りだから、仲良くしておこうというだけのことである。

だが、そのことをもって、親切が不純だとは、いわないであろう。他人同士が近づくきっかけはそうあるものではない。親切は、それを実現する。しかも、親切では、他者距離を維持し、遠慮しあつて、他人であることを超えて踏み込まないものだとの相互理解がある。ささやかな贈与、ちいさな手助けに限定しあつているのである。安らぎの我が家の隣りとは、できるだけ和やかな関係でありたいが、他人であることを超えてうちに踏み込んでこられるのも、困る。親切と好意は、そのことをうまく実現する。親切は、ここでは手段となっているのであるが、良好な隣人関係をつくらうというだけで他意はなく、これは、よい利用の仕方である。

親切の好意には、ひとは、好意をもって応えたい。それにふさわしい「感謝」の気持をもち、親切なひとの負担に配慮して「遠慮」もするし、自らも親切で応えようとする。この好意の応答には、さらに親切と好意が帰ってくる。隣近所に好意の好循環が形成される。他人であることを超えず、好意的に交わるという親切の好循環である。

Zu Wem Sind Wir Freundlich? -Das Zwischenmenschliche Verhaeltnis in der
Japanischen Freundlichkeit- Yoshiki KONDO

Es ist unsere Freundlichkeit (Shinsetsu im Japanischen), dass man die kleine Hilfe zufaellig dem Fremden, der Schwierigkeit oder Forderung hat, leistet. Das Wort dieser Definition mag "Freundlichkeit" im Deutschen oder "kindness" im Englischen sein. Waehrend die Freundlichkeit im Deutschen (kindness im Englischen) sowohl fuer Menschen als auch fuer Tiere oder Pflanzen gebraucht werden kann, ist das Objekt unserer Freundlichkeit nur der Mensch.

Noch mehr koennen wir Japaner keinen Saeugling, keinen paralysierten Menschen, keinen Leichnam freundlich behandeln. Unsere Freundlichkeit betrifft wahrscheinlich nur den Mann, der unsere freundliche Aktion als Freundlichkeit verstehen kann.

Ferner unser Objekt der Freundlichkeit (Shinsetsu) auf Fremde beschraenkt. Wir behandeln nur den Fremde freundlich. Im Deutschen (Englischen) kann die Freundlichkeit (kindness) auch in der eigenen Familie gebraucht werden. Aber gewoehnlich verwenden wir die Freundlichkeit (Shinsetsu) nie fuer die eigne Familie. Ich denke, unsere japanischen Familien lieben sich gegenseitig tief und koennen mit der Freundlichkeit als kleiner Liebe des Zuschauers nicht zufrieden sein.

Weiter muss dieser Fremde, den wir freundlich behandeln, im konkreten Sinne die Schwierigkeit oder die Forderung in Bezug auf die Freundlichkeit haben. Wenn der Mann der gegebenen Freundlichkeit nicht zufrieden ist, ist diese Hilfe keine Freundlichkeit sondern nur nutzlose Unterstuetzung oder die Einmischung. Muehe wird zur Freundlichkeit erst dann, wenn der Empfaenger mit Freuden sie annimmt.

『メタフュシカ』(大阪大学大学院文学研究科哲学講座)第35巻別冊 33~40頁平成16年12月)

(補) The Theory of Kindness from the Viewpoint of Japanese

Human Relations—Whom Are We Kind to?— Yoshiki KONDO

(この(補)英語論文は、第一章と同じ内容だが、少し詳しく述べている。)

1. We are kind to the human beings

We can define our Kindness (SINSETSU in Japanese) as “to make the small help by chance to others who have a trouble or a relish.” The word which corresponds to this definition may be “kindness” in English or “Freundlichkeit” in German. We, Japanese, are kind to neither animal nor thing. We are kind only to human beings. Our “gentleness (YASASISA in Japanese)” which is similar to kindness (SINSETSU) can be used for animals and things, too. But our object of kindly feeling is considerably restricted to a narrow extent. For example, when a drunken person bangs against a roadside tree, generally he says some excuse kindly to it like “ Oh! Sorry! Watch out!”, because he has mistaken a tree for someone—a person. But as soon as he notices that it is just a roadside tree, he kicks it with his foot with saying “Oh Shit! It’s just a tree in my way!” and shows by this action his regret that he had the feeling of Kindness to a thing—a plant. Differently from our Japanese “SINSETSU(kindness)”, “Kindness” in English (“Freundlichkeit” in German) can refer to the plant in a sober state, too.

The extension of Japanese kindly feeling seems to differ from that of English and German. “Kind” in English (“freundlich” in German) can be used in a broader extent than SINSETSU. The extent of their Kindness-usage is very similar to that of a Japanese gentleness(YASASISA). So can we say that Kindness in English may mean just only YASASISA(gentleness)---not SINSETSU(Kindness in Japanese)? The word which corresponds our SINSETSU is definitely “Kindness”, because the core of sense of Kindness seems to be equal with Japanese SINSETSU(kindness). There is a project known as the name of “The modest kindness movement(CHIISANA SINSETSU UNDO)” in Japan. Similar one is developed in USA and is named “The Kindness Movement”. The interest of this association is not like that of lovers of flowers club or the humane society. Their aim (The Kindness Movement) is to be kind to human beings. The core of their Kindness is similar with our SINSETSU(kindness) --- to be kind to human beings.

In Japan we don’t term it “kind(SINSETSU)” to help the cat whose leg is tangled with wool. In Japanese, we can describe, for example, “being gentle with the cat”, but not “being kind to the cat”.

Relatively Japanese distinguish human beings from animals less than the Western peoples. (The Western peoples strictly distinguish human beings and livestock, probably from their viewpoint of eating meat. The status of livestock is lower than that of wild animals). However, concerning Kindness, the Japanese

word "SINSETSU" excludes animals from its object precisely. Because a cat or dog cannot understand the Kindness of human and will run away from him, with the eyes of "I need no help! Leave me alone!"

I had already written that "the usage of Japanese Kindness" is restricted. Japanese can be kind only to human beings. But it is not an enough explanation of its restriction. Its usage is further more limited. We are not kind to a corpse of a person, although he or she had lived as a person and may still be defined as a "human". We can say, "I helped kindly the sick man on the next bed of mine to sit on the wheelchair". But we cannot say, after his death, putting him in the coffin, "I put him kindly in the coffin". Furthermore, probably we cannot be kind to a newborn baby or a vegetable, though they are not dead.

Concerning the sympathy(DOU-JOU in Japanese), Japanese sympathize neither with a dead person, perhaps, nor with vegetable. We sympathize with his family who are still alive, but not with the vegetable himself. When I went to the hospital to see my friend who had become the vegetable, and after that I noticed my feeling, saying "I sympathized...." With whom do I sympathize? Not with my friend, the vegetable. I felt pity and lament for my friend with regrettable tear, but I realized that I don't sympathize with him. The one whom I sympathize with may be the family of my friend. We also don't sympathize with the innocent infant who is at the assembly of the relatives for the funeral of his father and happy with the situation because there are many relatives. He cannot understand the situation and cannot empathize with other peoples at the funeral. This infant draws our pitiful tears, but we don't sympathize(DOU-JOU) with him. If we "sym-pathize(DOU-JOU)" with him, we may share his happy feeling at that funeral hall with him, because DOU-JOU means to imagine the Same(Dou) Passion (JOU) . But English (German) speakers feel "compassion or sympathy" not only with a corpse and infants but also cats and dogs. This difference between Japanese Sympathy and English (German) parallels that of the Kindness.

We don't direct sympathy or kindly feeling toward these creatures (a dog, a cat, a corpse and so on). Because in sympathy we hold "sym(DOU)" and "pathos(JOU)", so the object of sympathy must hold "sym(DOU=same)" "pathos(JOU=passion)" with us perhaps. But there is no "pathos(JOU)" in the corpse. Neither is in the vegetable. I guess that the similar concept is in the feeling of Kindness. In other words we presuppose that the person who receives our Kindness "can understand" our Kindness as Kindness like we do. We are kind to neither plants nor dogs nor cats, because we recognize that they cannot supposedly understand our "kindness(SINSETSU)" by themselves. We look at the object carefully. According to the status of the objects in our society, we change delicately our attitude or feeling toward them. To a flower, we are not "kind(SINSETSU)", only are "kind(YASASII=gentle)".

(We are kind only to the man who can understand our Kindness) That is to say that the object of our Japanese kindness(SINSETSU) is restricted considerably ; it must be the person who understand our kindly performance as Kindness. We are kind to the person who has the same cognitive ability like us to understand

the Kindness. To an infant or a vegetable who does not have the human consciousness, we are scarcely kind. Because, I think, they seem to be lacking that sort of our capacity.

When someone says, “Let’s be kind(SINSETSU) to the flower !” or “Be kind(SINSETSU) to the frog!” (these applications of “kind” are normal in English), Japanese feel that in these expressions the flower or the frog is treated as to have the cognitive ability of a human. These expressions personify the flower and the frog which receive the Kindness, and treat them as if they say, “Thank you, Miss!” So we feel as if we find ourselves in the world of infantile primitive animism.

However in reality, a frog jumps out with peeing, or a cat runs away, scratching our arm, from us in spite of our Kindness. And we awake from our dream and return to the reality. Then we calm down ourselves and say “You beast! You cannot understand our Kindness”, and after that we are never kind to them.

(Unnecessary caring or meddling) Kindness is a modest help, and is subtle. It must be definitely interpreted by the receiver of the Kindness as a Kindness. Kindness is not a merely imagined feeling, but must be an action, and recognized and accepted by the receiver as a Kindness. If my Kindness is not received as Kindness by the receiver, my favorable action becomes useless. This Kindness is not the SINSETSU(kindness). When we want to be kind(SINSETSU) to someone, we have to observe the person carefully and sense what he or she really needs or how we should be kind to him or her.

Furthermore, Kindness is sometimes considered as an “unnecessary caring” or a “meddling”. The Kindness which is interpreted as an unnecessary caring, is not Kindness. Self-righteous Kindness is quite troublesome. After being understood and received as Kindness by the receiver, our action becomes Kindness. It is the same process as love. If you “love” purely intently someone, but he or she rejects your love and he or she feels uncomfortable by your action, then this love may become a “sexual harassment” or a “violence”. Only when the receiver accepts your feeling of love, it can be regarded as a love. In the case of love, one-sided love also can be considered as the condition of heart “love” by the people objectively. But only kindly heart is incomplete to be kind (SINSETSU) to someone. SINSETSU ultimately must be an action. Insofar as the “heart” or concept, image of Kindness is in our mind like as one-sided love, and doesn’t harm the person, it is just a concept or idea, our feeling in us. However, Kindness (SINSETSU) must be an action, and the action of Kindness influences the receiver, and when the Kindness is unpleasant and hard to accept for him, it is clearly an injurious troublesome action. Every repulsive Kindness is not Kindness but an “unnecessary caring” or a “meddling”.

(Our Kindness is correlative) When the receiver regards it as a meddling, our Kindness is not Kindness but a meddling. Our self-righteous Kindness can absolutely not be a Kindness. Kindness needs to be received as Kindness by the receiver. Kindness depends on reaction of each receiver. With the one who understands our modest kindly behavior and mind, and may thank us for our Kindness, we can communicate, through

Kindness as a communication tool. Whoever receives the Kindness, must be able to understand that the kindly person tries to help to him with favor. In this regard it is an impossible request for babies, of course dogs and cats. It's necessary to become the age of boy so that he can understand the favor of man and does not cry even if he sees a rugged man being kind to him. Kindness can work as a way of a communication only between the persons who understand Kindness. Being merely kind or gentle(YASASII) is not being kind(SINSETSU). Only after the receiver's acceptance as Kindness, it becomes Kindness. Looking at the receiver closely, and sensing what he really needs. That is the key to be able to be kind. Whether we become kind, gentle, or polite, is up to it; how the receiver accepts our action.

According to each person, we change our attitude delicately. This change may have something to do with Language Manner. The Indo-European Languages simply have only one first person singular form like as "I" in English, but Japanese has many first person singular form according to each partner ; like as "WATAKUSI(I in politeness)" "ORE(I in familiarity)" and "Father(I in Family)" etc. "WATAKUSI" or "BOKU" is I in front of strangers or others. In front of my friend I call myself as "ORE" or "WASHI" etc. The father and the mother in front of their children call themselves as "Father" and "Mother". The figure of "I" is determined by the persons who we communicate with. Our concept of "I" in the communication is much correlative.

According to the communication partner, the figure "I" has to be changed. Or our eternal figure in the communication is subtle, and always according to each person, we formulate the figure "I" correlatively. Also in Kindness, if I, the performer of kindly action, am called "the meddler" by the receiver, then I should think myself "I may be a meddler perhaps" in dismay and accept it.

We look at each person carefully. We observe how our correlates watch us and adapt ourselves to the image that is made by them. Human being is originally social animal and his "self" should be defined correlatively in our society. In Japanese society, this correlative way of "self"-definition and the reliance on one another play more important role than the Western society. On the one hand, one can see that we are full of warm, but on the other hand, that we are lacking in a voluntary or independent spirit.

In the West the movement of the individualism in the society is strong and the individualizing is seen as "the way for each persons to be independent in a society". The negative aspect of that is that people tend to pay less attentions to each others. As far as the individualizing in a society, Japan is intrinsically and traditionally not interested in that. Our culture is completely different from the Western culture and, in Japanese society, the concept of individualizing cannot play and have played any important role. Wherever or whomever they face, Western people can maintain their unchangeable figure of "I". They also do not change this attitude, when they are kind to others. So it is not important for Kindness-performers who the receiver is --for example a dog or cat--or how the receiver is---for example alive or not. "I", the consistent invariable

and kindly person, carry out the Kindness. This fact is much more meaningful for their concept of “Kindness”.

2. We are kind to others

In Japan we are kind only to “a man” not a cat or a dog. Furthermore, in regard to our restriction of the Kindness-usage, “the man” must be a merely “stranger/ others”. I don’t perform the kindness(SINSETSU) on my family. Concerning the Western concept of “Kindness”, they are kind to a dog and a cat as well as their family. The Germans also can say their Kindness (Freundlichkeit) toward their own family. Since the individualism penetrates through their society completely, the difference between inside and outside of family seems to be relatively not a matter for them. So, is the Japanese Kindness-usage not normal? The explanation for this custom is that in Japan the partition between inside and outside of the family is big. So one can be very kind(SINSETSU) to others outside of his family, but not to his own family and also cannot sympathize(DOUJOU) with them. The parents who “are kind to their own children” don’t exist in Japan. When we hear, “He had been kind to the child”, we know that this child was not his child but other’s. The same goes for the sympathy(DOUJOU). The parents who sympathize with their own children also do not exist.

Why Japanese don’t use the words “Kindness” or “Sympathy” for their own family? Concerning the help or the regard, of course, we carry out such Kindness-like actions toward our own family. The point is that we have a special deep feeling to our own family. Every time when there is a trouble in the family, we do not perform a small help, but devote ourselves to solve it. We need have a deeper feeling than performing the Kindness (It is equal situation with the Sympathy toward the suffering. We can sympathize as an onlooker with others but not with our own family. We share the pain or suffering within family-members directly, because there is no distance between them). It may be equal to European. The Japanese distinguish especially strictly the family from others and don’t refer the external Kindness to the internal family. In the family, we cannot satisfy with using the normal concept of the Kindness and the Sympathy. Namely, within own family, we need to use a special kind of that concept---“the ultra-Kindness and ultra-Sympathy”.

Kindness is merely a small help in an unexpected encounter with leeway. Kindness is essentially “the modest Kindness”. In Japanese family, like other cultures, parents devote themselves to their children and their voluntary assistance is very natural and very beautiful---- they are ultra kind to their family every day, even when they have no leeway to be so. This tendency is strong in Japan. A mother devotes herself to her family completely. She is every day ultra kind to her family---Some scholars name it “shadow work” (the toil which is unpaid and not rewarded). This cannot be easily described as a “Kindness”, the small help with leeway. A father donates all his salary to his family --not a friendly pocket money-- and run through his

lifetime just only doing that. That is also the ultra Kindness—I want to call it “shadow donation” (the empty contribution). These great donation and work cannot be described with the word of small Kindness.

In comparison with the scarlet deep love, the ultra-Kindness to own family, the faintly warm Kindness of small thin pink loses a color or disappears.

“Kindness” keeps the distance to others and only offers a very small superficial assistance. In the action of Kindness we must not step over the boundary of others. We should restrain ourselves so as to offer just the thin-pink favor, Kindness. It is absurd or a nuisance to offer the deep scarlet love. For example, when some young lady asks a man “to carry her heavy baggage”—for Kindness—for a small help, but he wants to be ultra-kind to her with the scarlet deep love and says, “No problem. I am glad to help you. Anyway, are you alone here? You must feel lonely. So we shall be tonight together...” She is neither his wife nor girlfriend. His affection for her is too much. His Kindness is spoiled by this intensive affection completely.

Kindness is essentially a “modest Kindness”. Kindness exists probably also in the family, but in front of the big ultra-Kindness, it comes to disappear. In the family, the core of love is not thin pink but deep scarlet ultra Kindness. When we set a fanciful distance between family-members and us, exceptionally we can use sometimes “Kindness and Sympathy” against our own family. In such a situation, the scarlet dyed love becomes into the thin pink feeling—the “Kindness”—because the virtual distance works as white paints and dilutes the strong color—the scarlet into the thin pink.

For instance, a father who has trouble with his personal computer, says to his son who teaches him how to use the PC; “I cannot understand what you are talking about. Can not you be more kind to me?” In such a situation, on the one hand, they sense a kind of distance actually between them, but on the other hand, they cannot help but recognize each other as a family, unconsciously. In other words, they cannot pay attentions or respects like they usually do to others. The problem is that there is a distance between them and intrinsically a certain respect or attention should be paid. So the father is not happy, because he feels that he should be taught with the heart of generosity, so-called, with SINSETSU by his son---the virtual stranger.

Also concerning Sympathy, a daughter can say to her mother “I sympathize with you that you could not be allowed to go to school, when you are a child. Your generation....” and so on. Here also this daughter ranks her mother who exists in another world and irrelevant time and sees her mother objectively—as an observer. Normally in Japan we don’t sympathize with our own family, for we cannot behave ourselves as observers of own family and are likely to share the pain with the sufferer in family and agonize about this suffering together. Since the daughter in the above example becomes an observer exceptionally, she can say to her mother “I sympathize with you”.

(To others/ strangers) The typical Kindness may occur among others who meet unexpectedly each other. For example, even if the expenditure of time to carry Kindness out is almost as long as the one to fulfill a

voluntary work which is similar to Kindness, there is a specific distinction between them. The voluntary work is a planned, precisely organized assistance and a full-dress work. The volunteers devote themselves to the work. They can and have to go wherever and whenever their assistance is needed. But Kindness is just a small improvisational assistance. It is a non-essential performance against accident or trouble, by the one who are there by chance. That is to say, strangers are kind to other strangers.

The very situation in which “Kindness” takes place is following; a man wants to do something and so he tries to prepare for that closely and perfectly. (When we want to do something, we should prepare for it, perfectly as we can, by ourselves in general—it is a duty and general courtesy.) In spite of his careful arrangement, he faces some difficulties. Then, he needs help. When the problem is too complicated, normally he had better ask a specialist to solve the problem. When the problem is too trifle to worry about, one good way to deal the problem is just to leave it. However, if he can find someone at the very time, he can ask him for a small help. The “someone” helps him—that is the “Kindness”. We can ask a stranger for a kindly assistance—a small assistance.

But, one should not ask the “someone” for a small help—the Kindness—who is far away from him. Please once imagine that you are in an island. You want to camp there, so you need to set a tent up. Mostly it is little bit difficult to set it up only by yourself. At the very time, you find a huge tanker on the horizon. You shout toward the tanker; “Help me!” Then the tanker changes the direction toward the island to help you. The sailors land on the island and you ask them for their Kindness; “Could you kindly help me to set up my tent?”

It is absolutely not a proper situation for anyone to perform the “Kindness”. Concerning the Kindness, “to assist merely others” is not an enough perfect requirement. The one whom we kind to must be restricted to the very stranger whom we encounter in the same place.

The Kindness, which we direct toward others, is a pure Kindness. The Kindness, which is made to the friend, can hardly be such a pure Kindness, because the excessive calculations are often involved in that kind of Kindness --- for example, to avoid being disliked by him, or to be assisted some day by him. A pure Kindness without such an impure concern can be made more easily to others in general.

3. We are kind to the person who has a trouble or a relish

The kindness(SINSETSU) is a voluntary modest assistance to help someone except for family-members. Well, is this also Kindness, that a man goes around his neighborhood and throws some monies into the letter box of neighbors, or offers persistently a sightseeing guidance to a traveler whom he happened to meet on the street? His intention is that he wants to do something good for someone and he can feel “I had done a good thing for him. It please me...”, but it must be a nuisance or “unnecessary caring” to the receiver of this

self-righteous Kindness. In some instances this kind of action becomes a harassment or a crime. The one, whom we are kind to, must be in trouble. When we will be kind to others, it's necessary to check whether they are really in trouble and request our Kindness.

When we meet only the person who has no problem or no want, there is, regrettably, neither need nor chance for Kindness. First of all, the Kindness starts with noticing that there is a person who is in trouble or in want. At a station, it is natural to be kind to a person who has a difficulty to find his way. But we should not perform this Kindness toward commuters who know their way very well and absolutely are not in trouble. There is no chance for Kindness to play a role.

“Trouble(KON)” in Chinese character shows that a tree is surrounded with a frame and is in a tight condition. Although a man (who is symbolized with a tree) wishes or wants something, he encounters difficulty (the frame) to get it, so he is confounded and is suffering from it. Kindness is the very help for this man.

Through Kindness, we can communicate with not only a person who is in troubled, but also who has a relish for our donation of Kindness. When someone has a relish, desire or want, we kindly respond to these. For example, when you make a cup of coffee for yourself, then you see a man who seems to also want to have coffee and you guess that he wants coffee. So, in addition to your coffee, you make one more cup of coffee for him. This may be Kindness.

However, it is not Kindness but an “unnecessary caring” or a “harassment”, to make coffee for the person who does not want or like it. Same act can be interpreted as a Kindness as well as an unnecessary caring or a harassment. The interpretation is up to the receiver of the act.

(To perform a "small Kindness" is kind) When someone is in trouble or wants something, but the trouble or want is too complicated or too much for us, then we don't perform Kindness. Strictly speaking, the one who perform “Kindness” must recognize that the (Kindness- receiver's) problem is enough easy for him (Kindness-actor) to solve. Whether the problem is heavy for the receiver or not, does not play a great role for performing Kindness. In general, Kindness should be a “small help” in a modest way.

It is normally a stranger whom we are kind to. If a stranger who has a problem with money asked us for 500,000 yen at the station, nobody can be kind to him. We may understand this request as a joke, mishearing or kind of extortion. The trouble or want which can be treated with Kindness must be small enough for the Kindness- performer.

For our own family we devote ourselves with ultra-Kindness to solve problems—even if it is extremely difficult. When a grandson calls his grandmother with a tearful voice; “Grandma! Help me! I got a problem with money! Can you please remit the amount of 500,000 yen into my account as soon as possible?”; then it is natural for every Grandmas to run to the bank immediately and pay into his account. How rich Japanese

pensioners are! Well, It was a crime which I had read in newspapers recently. Sad to say, the “me” was not her grandson but a stranger, wrongdoer. It is a good case to see how devotedly and blindly a family-member sacrifices oneself to solve the problem of another family-member. Unfortunately, in this case, the wrongdoer benefited from this warm Grandma’s self-sacrifice. Compared with our this attitude toward family, we are rather cold to others. The assistance against others, is restricted within merely a small deed without any stress. This is our kindness (SINSETSU in Japanese).

In Japan, we often use the expression, “CHIISANA SINSETSU (modest kindness)”. Here, I want to explain “the modest Kindness” with some examples. Firstly “(modest) Kindness” must be a small help and should not be stresses neither for the Kindness-actor nor -receiver. So, we Japanese use this phrase “ It was just a trifle thing. Don’t worry.” frequently, when we do Kindness for others—even if the action is not trifle. With this phrase we show that the Kindness-receiver has no responsibility at all to pay back the same quality and quantity of Kindness to us. That is our humility. In addition, the Kindness-actor indicates by this phrase that Kindness is relatively easy for anyone and recommends the modest Kindness-movement to the Kindness-receiver and promotes this movement in our society.

Secondly, a certain manner should be followed by both Kindness-actors and -receivers. They must respect the distance between them to keep their contact as just a modest relationship—they have to be conscious that they have no personal relationship. When someone asks you the way to the station, you have only to tell her “the way to the station”. That is the Kindness. It is verbose and indecent to behave yourself like “Yeah! I know the way! Follow me! I can go with you. Oh! I have enough time today. So how about having a dinner with me tonight?” That is absolutely too much for a person who just wants to know the way to the station. This act is against the Kindness-manner. So it cannot be Kindness.

A typical and effective Kindness is in such a case like the receiver of Kindness is subjectively in a big trouble and the assistance of a kindly person succeeds in helping him with just a small work. It is a “small Kindness” for the performer and a “big Kindness” for the receiver. Both the Kindness-actor and -receiver are mostly conscious of this effective situation and favorable relationship. When someone is inexperienced and cannot understand a resolution at all, he is puzzled and in panic, then the kindly person comes and assists easily with saying, “This is just a piece of cake!” Good examples for that are that a postman shows the way for a stranger or a student of informatics inducts a PC-beginner into the use of Personal Computer.

We are kind to others who are in trouble or have a relish. But it is often difficult to perceive by appearance whether the one is in trouble or not, for problems are more subjective things. When a person expresses “I am in trouble”, then the problem can be clearly recognized as a problem by people around him. Therefore, we ask someone the way, we ask someone for help to solve the PC-problem. These are our very expressions “ I am in trouble”. To react to such a request can be regarded as 100 percent Kindness and that kind of Kindness

is really welcomed by the Kindness-receivers. However it is generally not so easy to say straightforwardly “I’m in trouble!” Such people tend to keep the problems in their own mind and try to solve them by themselves—sometimes because of shyness, sometimes because of the anxiety to depreciate his evaluation in society. In this case one should start Kindness with finding the want itself.

It is difficult to perceive by appearance, whether a person is in trouble and has a relish. Many people feign often that they are not in trouble or do not have any want. Just finding out these troubles or wants can often help them and can be interpreted as “Kindness” by them. However, it is really difficult to find out the hidden problems. For instance, when we see a person who is evidently poor, we recognize his situation as “problem”. Because, in our society, poverty is obviously recognized as “Problem”. So, many of kind persons will perceive that they should make a small help for him. But it is also the reality in our society that there are some poor people who do not think themselves poor at all or poverty as their pride. To rescue these people from poverty is therefore surely regarded as an unnecessary caring.

Sometimes, just to fulfill someone’s want cannot be a Kindness or, at worst, becomes an unnecessary caring. To give a cigarette to a person who seems to want it eagerly, is not a Kindness but an unnecessary caring, when he managed to break his habit of smoking.

We cannot look at the inside of other person’s mind and only imagine it, so we occasionally carry out unnecessary Kindness to a person who is not in trouble in fact. This Kindness becomes an unnecessary meddling for him. The excess of Kindness creates rather the trouble to a person who isn’t actually in trouble and makes nuisance to him. In this case, to restrain Kindness is Kindness. The different sense of value often triggers some misunderstanding.

And occasionally the excess of Kindness causes the overgrowth of parasites who rely upon the Kindness. Climbing the mountain climbing without any provisions, they call easily helicopter when they are in trouble. They do not bring their own umbrella, in spite of the relatively precise weather forecast, and lend the other’s umbrella, when it rains. It is true that Kindness makes them parasites. Against this problem of parasites in our society, we must stop Kindness toward them. That is for the real and forward Kindness for them.

4. We are not kind to an unpleasant person (even when he is in trouble)

We are kind to others who are in trouble or have some relish to be helped. This Kindness works perfectly for its receiver. But the Kindness-performer is also a human who has own will and intention. So it is up to his discretion, whether he carries out the Kindness or not. Kindness is not a duty. It is an optional spontaneous donation with benevolence or favor. So we are never kind to the sufferer whom we hate. We hesitate to be kind, when we can guess a disgusting reaction of the Kindness-receiver to our Kindness. Also, we try intentionally not to be kind to a person who is absolutely independent and feels the communication through

Kindness uncomfortable. We are naturally also not kind to a man who is selfish or egoistic and does not thank for our Kindness. According to one's etiquette, we can freely decide whether we perform Kindness or not, for Kindness is small yet a burden.

Because the disgusting, uncomfortable person is a person whom we want to keep away from us to avoid facing. We try to make a big distance intentionally, so that it is difficult to actuate our Kindness. However, in view of the morality, we help also such a person, sometimes, when he begs us to help him or the problem seems too serious to ignore. In this case but the sensible warm consideration which is particular to kindly actions cannot be seen.

We normally want to punish the person whom we hate or to erase, negate his existence. So, it is ridiculous to make the donation of Kindness to him. We want to task heavy punishment to him; like the grotesque punishment against the greedy old lady of our fairy-tale "SITAKIRI-SUZUME(the sparrow to have been cut its tongue)"; and to reject to donate him any good things. Although Kindness is a small help and small donation, this deed is evidently advantage for the receiver. Therefore, even if a person is in trouble and wants anything, we usually hesitate to perform our Kindness against the person whom we hate.

When our minds are full of "hostility" or "malevolence" against a person, we will and can not carry out the Kindness to him. Kindness is a small but voluntary donation of valuable things. That is to say that Kindness for the enemy is to profit this enemy. Since the hostility is a strong intention and inclination to antagonize and harm the enemy, so it is very contradictory to profit him with one's own Kindness. The malevolence means also one's underhanded, cold malice to be delighted with one's unhappiness and to try not to do anything good for the person. We hold in general the hostility and malevolence against our enemy. So, it is really ridiculous and very rare to solve his trouble with Kindness.

(We are kind to the person whom we hold in regard) The person whom we are kind to is others who have some want and against whom we have no hostility or malevolence. In addition, we are kind actively to the person whom we hold in regard. Normally, one's positive impression (outlooks, behavior etc.) is the trigger to carry out Kindness toward him, because we can easy hold such a person in regard and he makes us to wish his happiness.

To be asked for Kindness is often by chance and by unknown others (ex: being asked the way at the station suddenly.) Being asked by somebody "Where is a police box?", we reply in an instant, "Go straight and you can find it in the left". This action (Kindness) is usually fulfilled in a so short time that we do the Kindness without pondering whether we really like the person or hate him. However, the "positive" impression of the Kindness-receiver is a very important factor for us to perform Kindness. Please imagine your prototype of nasty person. Can you actively kind to him? I suppose most of you feel some unconscious hesitation to perform Kindness toward him. The good example of the prototypical nasty person for our generation in

Japan is a young person with dyed brown hair. And they know that they cannot give us a good impression because of their outlook. So, they try to make a better impression by their behavior, when they need our help. When they ask us the way to the police box, they ask very politely like “Could you kindly tell me the way to the police box?” —not “Hey you! Tell me the way to the police box!”

It is not a necessary factor for the Kindness to hold our favor, but we can say that we are hardly kind to a person whom we hold malevolence or hostility and who disgust us. Concerning our kindness we are free to do or not to do. If we don't like to do, we need not be kind to. Kindness is never a duty and we cannot be forced to do that. To force someone to be kind is extortion or threat. Against the request like “Give me 100 yen” at a station, if we respond voluntarily with favor, it is a Kindness. But if we are forced to respond to the request, it is often an extortion and crime.

Anyway, we are mostly kind to an acceptable person, actively. Such a person stimulates our unconscious desire to shorten the distance between us: the feeling is never an excessive one. This desire is often the trigger for the Kindness.

(The target of the “benevolence” and the “mercifulness”) “Benevolence” (ZEN-I in Japanese/ ZEN= good, I= will) means the intention to do something good to someone—the antonym of malevolence (AKU-I/ AKU= bad, I= will). More precisely, when we have this intention, we try to understand a person affirmatively and to be so altruistic that we can do something good for him.

The targets of our Benevolence are often the weak in our society who are, for example, handicapped. This is a different aspect from Kindness with Favor. It is but the very same that both words can be used as the action or feeling toward others. The action that we do for our own family with good will is never “benevolent” nor “favorable kind”. My family is myself, i.e. my family trouble is my trouble and my family happiness is also my own happiness. Concerning the thing to do with ourselves and our own family, we can scarcely be an observer to see it objectively. As regards Japanese benevolence(ZEN-I) and favor(KOU-I) (and also malevolence), it is necessary for us to stand on a viewpoint of an observer.

The favor is much subjective feeling than the benevolence. Favor is to like a person and pay regard for him. So it is natural to feel, more or less, toward a favorable person that we want to approach him. The benevolence is, in this point, completely different. The benevolence is the intention only to think about the advantage of others—there is only the feeling that we SHOULD do something good for him.

Kindness with favor is “WANT (Wollen)”. Kindness with benevolence is, in comparison with the above, “SHOULD (Sollen)”. Benevolence is a very effective trigger for Kindness-action. We feel that we should do good for a person even if we are less ready for being kind. So, with the Kindness of benevolence, we can simply help the weak or sufferer—even without favor.

“TTSUKUSIMI(kind of affection and mercifulness)” or “JIHISIN(mercifulness)” can be categorized into

the same kind of feeling as “favor” and “benevolence”. The particularity of the “ITSUKUSIMI” and “JIHISIN” is the affection (or love) of philanthropy.

The favor and mercifulness have the aspect of “a love to give someone”. However, the character of the both is very different. Concerning the character of favor, there is danger that it causes us the strong inclination to get the love of the target-person and occupy him, even if we need to deprive his love of someone. The affection of mercifulness is different from it. With this affection, we can simply concentrated on showing and giving our “(kind of) love” to a person, perfectly; the love to give someone.

Regarding ITSUKUSIMI we need not restrict the target strictly like “Kindness”. We can hold this concept toward our strangers, own family, plants, animals and also just a thing like a stone in our hand. We can be merciful for anything and try to treat them with tenderness. In addition, it is no matter for us whether the target thanks us or not. Mercifulness is the generous contributive attitude.

When we hold this merciful affection toward someone, we may passively abstract ourselves like the “I” in Western concept of Kindness from that of Japanese. Or on the contrary, the “I (EGO)” disappears perfectly—as if we are in the state of “MU (0, empty, realized state of ZEN-Buddhism)—and we wish other person’s happiness.

When this feeling is the cause of Kindness, we can be kind even to the one against whom we hold the hostility, because the heart of “ITSUKUSIMI” is much bigger than negative inclinations like hostility or malevolence.

5. Kindness toward selected targets

(Kindness with secret intention) It is not difficult to communicate with a stranger through Kindness. And, in fact, “Kindness” is a good chance to be acquainted with unfamiliar persons. So, regrettably, Kindness is often used just as the means to this end, without benevolence, mercifulness and courtesy—the Kindness with secret intention. Differently from the Kindness with benevolence etc., the social weak are not the target of this kind of Kindness at all. The purpose of the Kindness with secret intention is not to act “Kindness”. It is just a means to one’s own end, his secret intention. Through the kind action one can approach an unfamiliar target without being suspected and get a big game by a light work.

And the one can justify his “this” behavior, though his secret intention, that he had performed the kind action, only because he was unexpectedly next to the Kindness-receiver and asked for Help by him.

Originally, Kindness is performed by a stranger, for example, a person who you meet on the street, incidentally. We usually accept such a Kindness without skepticism. Kindness is a little and light contact between the Kindness-actor and -receiver. So, it is not necessary for the Kindness-receiver to feel that he owe the actor a thing. And Kindness is not often rejected, because receivers normally interpret his action as

“Benevolence” or “Favor”. The one with secret intention utilize these aspects of Kindness to realize his aim.

The secret intention is often criminal. The people with such an intention feign that they are really kind to fulfill their want or plan. In extreme case, the intention is to kill someone or to commit robbery. So, for them Kindness is absolutely an instrument to approach their target- person. We had better be careful of the Wolf in “Little Red Riding-hood”.

The another form of Kindness-misuse is “Fake-Kindness (SINSETSU-GOKASI)”. In this case, one behaves himself very kindly and at the same time tries to benefit himself. Kindness is not the way to approach someone, but such a person makes just much more on the fulfillment of his plan or want. The good example for that is the monkey in Japanese fairy-tale “SARU KANI GASSEN(the battle of crabs and a greedy monkey)” who gave a green, not ripe Kaki kindly to the crab.

The difference between “the Kindness with secret intention” and “the Fake-Kindness” is following; the secret intention of that Kindness is hidden behind the kind behavior and attitude and hardly can be seen by appearance. This kind of intentions can be, as I already written in above, often criminal. In Fake-Kindness, one does not intentionally try to conceal that his advantage is a priority matter. In former Kindness, the performer tends to be excessive kind and devoted to hide his intention (ex: The Wolf in “Little Red Riding-hood”). In the latter case, the performer seems that he regardless persists in his advantage, when his Kindness is smaller than his greed (ex: The Monkey who throws a green Kaki at the crab).

(The target of the instrumental Kindness) Kindness is directed towards others who are in trouble or have a relish. This condition can be applied also to the Kindness with secret intention and the Fake-Kindness. However the latter Kindnesses’-actors select their target, according to their aim. The Wolf in “Little Red Riding-hood” will be kind neither to a woodman in trouble nor to a crying lost-boy. He aims only at the “Little Red Riding-hood”, who can satisfy his lust. He chooses the very Kindness-receiver who can be suitable to gain his end.

The Fake-Kindness has the same character, as regards the choice of the target. The Monkey will be kind only to the crab, the owner of the Kaki-tree—never to unproductive meaningless crabs in trouble. The target of these Kindnesses must be limited to the one who benefits the Kindness-actor. In the Kindness-Action, this sort of Kindness-actors are haunted to get as much profit as he can.

The both Kindnesses aim not to help someone but to satisfy his own greed. In some cases of these Kindnesses, the receiver’s want or relish can be actually fulfilled and they are happy with that. But that means (almost) nothing for this kind of Kindness-actors. The aim is the fulfillment of their own desires. In other words, they are not kind to others, but to themselves.

(The communication with neighbors through Kindness) Kindness is performed to others next to you. The others who are always next to you are—your neighborhood. We usually try to be kind to each other, because

of a certain purpose—kind of secret intention. We show through our kind behaviors that we have no hostility nor malice against them and want to keep a good relationship between us. The Kindness can create a friendly relationship under a consciousness of the positive distance between us. This purpose can be also defined as the secret intention, probably. We want to be in a good relationship with neighborhood, just because they live accidentally next to us. For this purpose we use the Kindness actually instrumental.

However, concerning this intention, one cannot say this Kindness is adulterate. It is natural for us human beings to try to communicate with other persons around us in a peaceful and friendly way. Through Kindness, indeed, one can easily realize this intention. In addition, the communication through Kindness keeps an adequate distance as “others” between communicators (Kindness-actors and -receivers). The Kindness is a small donation, a small help under the consciousness of a certain distance. So, we understand each other that we should not step over the border as “others” and should keep the comfortable distance so that we can behave ourselves with respect for each other.

With neighborhood of our own family, our sanctuary, we want to have a friendly and comfortable relationship. However it is troublesome for us when one ignores the distance between us and steps over the border. The communication through Kindness maintains this distance. The Kindness is the means to show our neighborhood that we have no intention to hurt them and try to maintain the good and long relationship with proper distance as neighbors. About this instrumental Kindness, we need not to be nervous. Indeed, we use Kindness to realize a certain purpose, but the character of this intention is completely different from that of the Wolf in “Little Red Riding-hood”. This Kindness is actually instrumental, but this instrumental Kindness is, in this case, “instrumentalized” in a good way.

We are likely to react upon one’s Kindness with Kindness. We show our proper gratitude and politeness to the kind person. A Kindness-receiver often rejects one’s Kindness with thanks, in consideration of Kindness-actor’s loads. Such a kind attitude of Kindness-receiver inspires the actor to greater inclination to be more kind to him, the receiver. Here the favorable circulation of Kindness grows. Even if one performs Kindness without goodwill, we cannot see his inner mind directly by his appearance. So we can only guess his inner mind by his kindly appearance and behavior. Therefore we incline to be kind to him in return for his Kindness. Here, too, the circulation of Kindness can often arise and grow—the Kindness-circulation with others and neighbors in a comfortable, favorable distance.

Resume:

The Theory of Kindness from the Viewpoint of Japanese Human Relations—Whom Are We Kind to?—

Yoshiki KONDO

We can define our kindness (SINSETSU in Japanese) as making a small help by chance to others who have a trouble or a relish. The word which corresponds to this definition may be “kindness” in English or “Freundlichkeit” in German. The Kindness (Freundlichkeit) in English(German) refers not only human beings but also animals or plants, the target of our kindness (SINSETSU) is restricted only to human beings.

Moreover we Japanese cannot be kind to an infant, a vegetable and a dead. Our Kindness refers probably only the person who can understand our kindly behavior as Kindness.

Furthermore our object of kindness (SINSETSU) must be restricted to others. We are kind only to others. In English (also in German) the Kindness (Freundlichkeit) can be used in each family, too. But usually we don't apply the Kindness to our own family. Because, I think, our Japanese families are dissatisfied with the expression like “Kindness” which sounds too distant for us to refer to own family.

The one whom we are kind to must be concretely in trouble or have relish. If a person who received our Kindness feels displeasure with it, this Kindness is not Kindness but may be an unnecessary caring or meddling. Kindness must be interpreted as Kindness by the receiver freely.

The performer of Kindness also must be free. We are free to be kindly or not. We can select the target (person and matter) of our kindly performance at will. In this respect we are apt to exclude the unpleasant detestable person from our Kindness. We tend to be kind to charming person with our favor. Or from benevolence in our mind we tend to be kind to a weak or an unfortunate.

The Kindness at our disposal is utilized sometimes for approach to someone ---not the assistance of others. Kindness is usually directed to others and the approach of someone to others with secret intention is not suspected by these others. Best and innocent example of this application of Kindness is one with the neighbors as others. This Kindness keeps the distance and good favorable relations with the neighbors. The neighbors also response to this favor with same favor and vice versa. In the Kindness a good circulation of Kindness arises often.

(『ふらくしす』 (広島大学応用倫理学プロジェクト研究センター・西日本応用倫理学研究会)
2004 Winter 1~15頁 平成16年12月)

第二章 親切な人とは、どんな他人か—人間関係としての親切論—

1. よく気がつき思いやりのある人

「親切」は、困ったり求めをもっているひとに対して、ささやかな手助けをすることである。困っていない者にする場合は、親切ではなく、よけいな世話やお節介になり、負担の大きいものは、親切を超えてしまう。親切にする人は、その辺りを心得ていなくてはならない。では、困っているひとに対してその微妙なところを心得つつ、親切をするひとというのは、どんな特徴をもっているのだろうか。

(よく気のつく人) 親切は、ひとりでは出来ず、その相手がいる。われわれの親切を受け取ってくれる相手は、他人であり、しばしば、見も知らずの行きずりのひとになる。この困っている相手を見つけなくては、親切は、実行できない。だが、よそ見をしないで、ひたすらに目的に向かっていて、他人の求めとか困っている姿は、目に入らない。とくに、困苦を隠している場合は、強いて親切を求めるともないから、これに注意しているひとでないと、親切にすべき相手に出会わない。親切には、ひとの困苦・求めの発見がなくてはならない点で、周囲に気を配るひとであることが望まれる。

親切にするその相手を発見するひとは、単なる好奇心旺盛な、詮索好き、知りたがり屋とは、ちがう。困っているひとに目を留める、求めるものがあるのではと推測する、優しい思いやりある目をもったひとである。周囲をきよろきよろと見回しているひとがあるが、たいていそういうひとは、親切ではない。かれは、ものごとの表面的感覚的な多彩さに気をとられていて、ひとの内的な思いへの気付きは皆無だからである。かれには、親切にすべき相手は見えていない。

(思いやりの気持のあるひと) 困っていること・求めに気付くには、その外面を通して、その人のところに思いをはせることができるのでなくてはならない。相手の立場になってみるという、思いやりの精神がなくては、困っていることには、気がつきにくい。相手の思いを察するのであり、自分の好意の「思い」をあげる(「やる」)のである。

相手の立場に自分をおいてみてはじめて、困っていることに思い至ることがある。親切なひとは、そういう思いやりがあって、ひとの求めるもの・困っていることによく気がつくのである。電車などで、若者がいるのに彼らではなく老人が老人に席を譲ろうとする光景を見かける。座っている老人は、立っている老人の気持ちがよくわかるので、おのれの分際を忘れて、ついゆずらねばという気になる。若者には、親切心がないのではない。声をかけると、気がついて席を譲る。困っていることに思っていたことがなく、気がついていないのである。

(日本では、親切な人とは、他人になる) われわれは、親切を家族にはいわない。ささいな援助としての親切は、他人に限定される。つまりは、される者からいうと、他人が親切にしてくれる

のである（家族内でも例外的に他人行儀になる場面においては親切をいうことがある）。われわれは、家族には、過剰なぐらい思いやりをもつ。孫が、電話で、「おれ、俺」と泣き付いてくると50万や100万なら、即座に、銀行に振り込んでやる。だが、それが他人だとわかったときは大変で、犯罪として警察ざたとなる。われわれは、家族には超親切であるが、他人には冷たいのである。他人にするものとしての親切は、ほんのささやかな手助けをすることにと限定される。

ただし、これは、日本的なことであって、欧米では、親切（英語の kindness やドイツ語の Freundlichkeit）を家族にもいうようである。個人にとって家族とそととの敷居はわれわれほどではないのである。もちろん、敷居を無視して超親切の思いやりを他人にもしていくということはあるから、他人への冷たい振る舞いを、家にももちこむということになる。本物の孫にも冷たいので、「オレ、オレ」詐欺は、成立基盤をもたない。

われわれの親切は、単なる贈与・慈悲ではない。他人同士であることを越えず、ささやかに触れ合うことにと限定して、優しい思いやりを発揮するのである。その限度を、親切にするときの思いやりは、ふまえている。自制した遠慮のある思いやりである。

親切では、これを求めるひとも、ささやかな手助けだと前提して親切を受け入れるのである。道をたずねただけなのに、しつこくついて来て、過剰な手助けをされるのでは、親切を受け入れることはできなくなってしまう。軽く触れ合うのみに留めることを相互に承知して、親切は成立する。

（好意的なひと、善意のひと）親切にする人は、好意的な人である。好意は、親切同様、家族にはいわない。好意は、あくまでも、他人に抱くものである。好意は、相手になんらかの引かれる価値を見出し、これに近づきたいと思うことであり、あるいは、これを肯定的に理解し温かく受けとめて、贈与的な気持ちをもつことである。好意は、やがて濃い愛にまで進むこともあるが、なお、それは、他者同士の垣根を取り払うものではない。家族のうちでの深紅の濃い愛に対して、それは、ほのかな薄紅の愛である。好意と親切は、同じように、他人に近づき他者距離を越えない限度で贈与的にかかわる。ただし、好意は、持続的であり、その相手が困っていないのみか、親切にされる側に立っても抱くが、親切にするのは、困っている者に限定される。

親切は、善意の気持ちでもする。善意も、他人に抱くものである。家族に他人行儀な善意などもつことはない。善意は、他人に善いことをと願ひ、そう意欲するのである。好意は、利己的に好きな者を近寄せたいときにいただくこともあるが、善意は、利己的ではない。あくまでも、利他的であって、相手のことを思い贈与的なのである。親切でいうと、善意からするひとは、弱者や受難者を優先して、公正にその手助け・贈与をする。好意からするひとは、場合によると、好きなひとを優先する。

2. あまり人見知りしないひと

困っているひとを見つけ出して、好意の思いやりをもって、それだけでは親切にはならない。親切は、実行されてはじめて親切である。思いから実行への移行が気軽になさなくては、親切な人間とはなれない。それには、まずは、困っているひとの実際を（場合によると余計なお節介になるかも知れないから）確認することが必要で気軽に声をかけられるのでなくてはならない。

親切の相手は、多くは、見も知らずの他人になるので、人見知りする者は、はずかしさがさきに立って近づくことがむずかしくなる。相手が美人であったりすると、恥ずかしがり屋の若者は、「下心がある」と疑われるかもと思って、親切な気持と、実行をためらう羞恥心のあいだで、動きがとれなくなる。

われわれは、内では元気で強いのだが、外に出るととたん、見知らぬ者の前では、臆し萎縮してしまうことがある。内弁慶である。そとにでると、まるで別人になって、おじけて恥ずかしさに負けて活動どころではなくなることもある。親切は、そとで見知らぬ者にすることが普通なので、内弁慶のひとにとっては、苦手な対応となる。周知したひとになら、即座に応じて親切にするひとであっても、そういう内弁慶のものは、そとの見知らぬひとの前では、たじろぎ、おじけづき、行為へと踏み出すことができない。親切心は、大いにもっている、外人に話しかけられそうになると、あわてて、逃げだしたり、話せない素振りをするようになる。

はずかしがり屋では、第一に相手を見ること、見られることを避けたいと思っているので、困っているひとに気がつくことが少なくなる。親切のための状況認識すらしがたくなってしまふ。困っていることが見えたとしても、こちらから声をかけるまでに進むことはますます少なくなる。

（恥ずかしいのは、どうしてか）われわれの多くは、親切の思いは十分にもっているのだが、恥ずかしくて、なかなか実行にまで踏み出せないで終わってしまう。羞恥心が、親切の実行にブレーキをかけていることがある。「恥ずかしさ」は、自己の属する集団とその規範から「はず」れる事態に直面し、自身これを否定的なことと見なし、「はずれ」ないもとの状態に戻りたいと思ひ、かつ、この「はずれ」を見ている否定的な目のあることを意識して、その「はずれ」の危機に防衛的な反応体勢をとろうとするもので、はずれることを自制させる感情である。

親切は、多くは、偶然的な出会いに求められるもので、常態からは「はず」れた行為で、かつ、まわりの他のひとは、その親切をしないのであって、親切にすることは、その場では、「はず」れた行為となる。しかも、しばしば多くの見る目がある。もちろん、それは、批判する目ではないはずなのだが、「見ている自分たち全員とはちがう、はずれた目立ちたがり屋！」という冷ややかな差別する否定的な目と受け取れる。そういう目を感じ、群れからはずれることを嫌うわれわれは、その親切という「はず」れた行為には、はずかしさをいだきやすく、それを思うと、親切心はあっても、つい実行をためらうことになる。

まわりを気にするのが、われわれの特徴である。まわりを気にするから、困っていることにも、よく気がつくのだが、これに親切にするとき、それを一人でするときには、ひとの目が気になり、

気恥ずかしさを感じて、自分の行動にブレーキがかかってしまう。よいことであっても、皆から「はず」れると、われわれの場合、恥ずかしいのである。

(だが、羞恥のたがをはずすのも、問題である) 羞恥心は、自己に守るべきものがあるときに、防衛反応としていだかれる。守るべきもの(美とか理想とかの規範価値)のない者には、その意識は成立しにくい。価値とするものから「はず」れても、そこに復帰・到達することは無理と断念して、その「はず」れを居直ってしまい(つまりは、その現状を当り前とし、「はず」れているとは思わなくなり)、見る目があっても、「それで、どうだというのよ!」と、好奇の批判的な目をはねのける凶太さを身心がもつようになると、厚顔となり恥じらいはもてなくなる。

「はずかしがるような歳ではない…」というのは、はずれるべきでない規範自体をもたないか、自分の現実の方に(美や理想の)規範を引き下げる生き方を身につけ、さらには、見る目があってもこれを気にすることのない状態になっている歳をさす。性的な羞恥心でいえば、その歳は、心身が生殖・養育にふさわしい上限下限の歳からはずれた男女になる。

羞恥のたがをはずす歳になると、周囲の自制させる目を気にすることはなくなり、非自立の心性の顕著な者では、これがところかまわず顔をだしてくる。見も知らずの他人と出会うことにもとっくになれて人見知りするどころか、これが常態化して、どこにあってもなれなれしく、ひとがいると親切にしたり、しばしば「よけいな世話」「お節介」をやってしまう。

3. 実行力・行動力の豊かなひと

親切にすべきことは、よく分かっているし、人見知りをする歳でもないのだが、親切の実行にまで至らない人がある。腰の重い人である。これに対して、現に親切なひととは、労を惜しまないひとであり、実行のひとである。恥ずかしくて親切にまで進めないひとは、相手が困っているから助けて欲しいといえ、引き受けることが容易になり、親切は実行される。だが、腰の重いひとは、そうなっても動くことをためらう。

「あるべき Seinsollen」ことから、「なすべき Tunsollen」ことへとすすんでいく必要がある。一般的に、親切であるべきだと思っただけでは、親切は成就されない。それを自分が引き受けて、自分がなすべきだと自覚して、実行することが大切となる。親切の落ち着くところは、相手の困苦への手助け、求めの成就である。いくら、親切心があっても、実際に手助けがなされないのでは、親切は絵にかいた餅である。

ただし、余計なお世話になりそうな場合は、親切の「気持だけで」十分である。「お気持ちだけ頂いておきます」と言われる場合、ときに、遠慮してそういうこともあるが、親切に関しては、ささいな手助けであるから、遠慮であるよりは、多くが本心であり、気持だけにとどめる方がよい。

(同情とちがう点) 親切と同情は、受難・困惑の他者への思いやりとして、その妥当範囲が重な

るが、そのあり方において異なった点がある。いずれも、他人に、傍観者としてかかわるもので、その点で、あたたかい家族への思いとは異なり、同じように冷たさをもつ。だが、同情とちがひ、親切は、傍観者にとどまっているのみでは、その親切を成就できず、ことの当事者となるのでなくてはならない。その相手に接触して、その困っていること自体に関与していく必要がある。

同情の場合は、その相手を傍観しているのみでもよい。観客にとどまっていたよい。しかし、親切は、同情とは異なって、「まあ、かわいそうに！」と観客にとどまっていたのでは、思い半ばにとどまり、親切とはならない。観客であったのだが、突如、舞台から呼びかけられて舞台の手助けをすることを求められるのである。舞台にほんのささやかではあるが、登場することになる。その決意がなくては、親切は、成就されない。

(腰は軽いが、逃げ腰ではいけない) 実行になかなか至らない腰の重いひとがあるし、即行為に踏み出す、軽いひとがある。日々の習慣となり、性格とすらなっている。ぐずぐずして、思いから行動までの距離の長いひとがあるものである。親切は、即興に求められることが多く、腰の重いひとは、即座に応じることができず、不親切になりやすい。その点では、腰の軽いひとが親切にはまわっている。困っていることに気付くと即座に手助けに動くひとである。だが、腰が軽すぎると問題となることもある。場合によると、早とちりして、軽薄に余計なお世話をしてしまうことになる。それでも、間違っていると聞くとまた直ちにその修正にと動くので、腰の軽いひとがよい。

ひとりなら自分が手助けするが、たくさんひとがいると、だれかひまなものが引き受けるだろう、かかると面倒だし、とためらうこともある。ものごとに主体的にかかわることなく、見物人・傍観者に、野次馬にとどまることが生活習慣病となっている場合、舞台にあがって演技することには不慣れで抵抗を感じるのである。

ものによっては、その親切をきっかけにどんどん関係を深めていく危険を思ったりして躊躇してしまうこともある。「どうせ他人のことだし、なんの責任があるわけでもないし」と。われわれの多くは、「イエス・マン」で、「断る」ことが苦手である。関係をもって、なにかを要求されると、これを安易に引き受けてしまう。「和をもって、貴しとする」聖徳太子の影響下にあって、断ることで「不和」を生じることがいやなのである。ずうずうしいひとは、このことを周知しているので、親切心に乗じて、どんどんと要求をエスカレートさせる傾向をもつ。そういう独特の悪循環に陥らないためには、ささいであっても、一切の関係をもちたないことが一番と考えるのである。

4. 世話好き

親切はささいな手助けだから、そんなに負担の大きいものではない。社交好きなひとには、負担がすくなくて相手には大助かりの親切は、買ってでもしたい楽しい活動になる。だれかれとな

く交わりを求めたがるひとがあるが、見も知らぬひととは、そう簡単に接触できるものではない。ところが、親切は、その見も知らぬひとに手助けをするのであり、社交的なひとには、格好の機会があたえられる。

無償の手助けだが、ささいなものであるのが親切の通常であり、軽い負担で、自分は援助する立場にあって優位をたもちながら社交できるのである。しかも、いやになったら、無償だから勝手にやめる自由もあり、親切は、社交好きのものには、高値でも「買いたい」楽しみになる。

困窮している者には、世話好きは、ありがたい存在である。好んで、自分たちの困窮を手助けしてくれて、それを、負担とするよりは、楽しみとするというのだから、気軽に援助・世話を頼むことができる。

(世話)「世話」とは、手助けが必要と思われるもの(依存的状況にあるひとや動物、ときには植物)に対して、手のかかるその助力を引き受けてそのために働き、力を尽くすことであろう。多くは、身近にいてつきあいのある者に対して、その手助けが必要で手数のかかりそうなことについて面倒を見ることである。

世話の手助けは、親切よりも持続性があり、相手の基本的なあり方にかかわり、その意義は大きい。身の回りの世話をしたり、学校の「うさぎ」の世話をすることは、たまたまの親切とちがい、してもしなくてもいいささいなものではない。欠くことのできない重要なもので、仕事というべきものである。「お世話になっています」とは、しばしば根本的で不可欠の人間関係のなかにおいて言う。ここでの世話は、ささやかでも、たまたまのものでもない。不可欠の手助けであり、本格的に手をわずらわすことである。

親切なお世話は、行きすぎると、否定的にみられて、「余計なお世話」「大きなお世話」となる。世話される者は、依存している者との意識をもつ。独立心に富んだものは、世話の有り様によっては、自己の尊厳が脅かされ侵害されるように感じる。その侵害が感じられるものは、「余計なお世話」となる。親切は、家族とちがい独立した他人に関わるのであるから、とくにこの他者距離を尊重して侵害には注意してはならない。

(お節介)「お節介」は、よけいな手助け、いやがられる介入・干渉の意味である。「世話」は、その言葉自体は肯定的であるが、お節介は、これ自体本質的に否定的なものである。不当な不愉快な干渉である。肯定的に受け入れられる干渉は、「手助け」「親切」「世話」等といわれる。お節介は、否定的に受け取られる干渉にのみ言われる。よいお節介は存在しない。

ただし、深い介入とちがい、ささいで表面的な干渉であるのが普通である。その不快な干渉はあまり本質的な打撃をあたえるものではない(か、そうなる前に拒絶される)ので、「よけいなことをして」とそのお節介になる部分を軽く排除して終結するのが普通である。お節介は、よけいなことなので、手出し自体はできなくて、やむなく口を出すことになる場合が目立つ。見知らぬ者へは、よけいなことは言いにくいので、お節介は、親切とちがい周囲の周知した者を相手にす

ることが多い。身近な者の行為やその計画について、多くは善意からであるが、よけいな口をさしはさんで干渉するのである。

古くは、これが親切の常態であった。個人主義の現代人には、内情にかかわることは干渉であり、お節介だが、かつては、大いに干渉し合うのがふつうで、したがって親切であった。親切は、親切にされる者の微妙な感受性に負うところが大きく、その手助けが余計と思われれば、お節介となり、ありがたいことと受けとめられるなら、親切となる。依存しあうことに慣れた社会では親切なことが、自立した個人主義の社会では、干渉には過敏で、余計なお節介と受け取られる。

(思い込み)「世話好き」も「お節介屋」も、自身が人づきあいが好きなので、みんなもそうだと見なして、かかわる。自立・独立型の人間にとっては、よけいな干渉であるものが、世話好きには、好意や善意の手助けであり、あるべき交わりである。世話好き・お節介屋は、しつけのわるい犬のような生態をもつ。むやみに嗅ぎまわり、じゃれつき、ほえまくって、通りがかりのものに関与しようとする。これを迷惑とする猫の「おみやあらの、世話ずきにゃあ、にゃんとも、あきれるにゃあ」という小言は耳にはいらぬ。

さらには、事実への干渉ならまだ我慢できるが、世話好きは、時に、主観的に勝手に、「隠しているが困っているに違いない」と想像して、的外れな、迷惑な「親切」をしてくる。普通に親切なひとは、相手が迷惑と思っていると察すると、自身には負担の親切だから、即座にこれを停止する。だが、世話好きの場合、親切にすること自体が楽しみになっているので、相手が迷惑がっけていても、そう簡単には、これを停止しない。

この世話好きは、意外にも、世話をされることには消極的なときがある。世話され劣等の位置におかれ自立を侵されることに敏感になる場合である。しかし、社交好きのところが勝っている場合は、親切にされることもいたく好む。世話をするすきがなくて交わりができそうにない場合には、逆に相手から親切をしてもらおうと接触を試みる。これは、多くの場合、成功する。困っているといわれ手助けを請われて、これを放置しておくことは気が引けるので、つい親切関係を結んでしまうのである。

5. 優しそうで暇や余裕のありそうなひと

ところで、親切にされる側のひとにも、親切にする人を選ぶ自由があろう。それからいうと、親切にするひとは、また別の特長をもつ。世話好き・お節介屋は、その相手を自らが見つけ出し、親切を開拓する。だが、他方では、親切は、困っているひとの方から求めていくものでもある。

困っているひとが、親切そうなひとを選ぶのである。こういう方面で親切なひととなるのは、多忙な世話やきとはまた別のタイプである。それは、まずは、暇そうなひと・優しそうで余裕のありそうな人ということになる。

(優しそうなひと) 選択の余地があれば、やくざ風の者には、親切は請わないであろう。親切な

人として選ばれるのは、ひとが近づきやすく怖くない人でなくてはならない。

道案内ぐらいだと、ほかに誰もいなければ、やくざにでもたずねることがあろうが、親切の内容が「小銭を（貸して）くれませんか」というようなものになると、百パーセント、親切を請う相手にやくざを選ぶ者はいない。優しい、温厚そうなひとが選ばれる。ばあいによると、自分より弱そうなものを選ぶこともある。ただし、これは、その弱そうな相手と金額次第では、親切を請うというより、恐喝になるから、その辺りをよく注意して選ばねばならない。

「やさしさ」は、人や動植物のみか、物にもいう。物を優しく扱うとは、これを傷つけないように壊さないようにと手加減し配慮してかわるることである。ひとや動物に優しくする場合、その心身を傷つけないようにショックや困惑を与えないように、荒々しく粗雑にならないようにし、細やかに気を使い、攻撃的になったり冷酷になることなく、あたたかくおだやかに関わるのである。

親切を請うひとは、困っていて手助けをもとめている。これに応えるひとは、その困っていることをよく配慮でき、こまやかに手助けできる優しいひとであるのが一番であろう。「乱暴なひと」「怖いひと」「きついひと」「冷たいひと」の反対である。攻撃的であったり無思慮・無情なひとには、親切の贈与は期待できない。立腹しているひとに、親切を請うことはあまりない。怒っているひとは、みさかいがなくなっているから、その攻撃の矛先を無関係の者に向けてくるかも知れず、そういうひとには、近づかない方がよい。

(ひまそうなひと) 優しくそうなひとが選ばれる筆頭だとしても、そのひとが親切にする余裕のないことがはっきりしている場合、断念せざるをえない。つぎに選ばれるのは、「余裕のありそうなひと」ということになる。見知らぬ町で、道案内の親切をと親切そうなひとをさがすとき、選ばれるのは、ひまそうな地元の老人や子供であろう。地元のひとと一見して分かっている、優しく親切そうでも、困っていることに注目してくれる暇があり、親切に手助けしてくれる暇がなくては、親切は請うことがむずかしい。

道案内では、地元のお店のひとがいいのだが、忙しそうにしていると、親切をたのみにくくなる。手助けをお願いするのであれば、そうできるだけの余裕のあるひとでなくてはならない。道案内であれば、近くまで連れて行ってくれる暇人が最適である。かつては、その代表は、ひまをもてあそんでいる地元の子供たちであった。

親切は、無償が大原則である。お金もうけ(仕事)の合間の暇を少しもらおうというのである。ボランティアと同じである。暇がないと、親切もボランティアもできない。ボランティアは、仕事をしながらでは無理で、これを中断して暇をそれ用につくる必要がある。しかし、親切は、ほんのささやかな時間があればよいので、仕事中でもいい。仕事中のひとにでも、親切は請うことが可能である。

(若干なりとも利他の気持ち) いくら暇があり、余裕があっても、社交的であっても、人のために

ひとはだぬごうという気持ちがない場合、ひとへの親切は成立しない。自分のためにしか動こうとしない者は、ひとに無償の援助・手助けをすることはしない。こういうエゴイストの前では、世話好きなひとなどは、天使のように見えてくる。親切にするひとは、その根本精神として、利己とは反対の利他・愛他の気持ちを若干なりとももっているのである。

見知らぬ者へは、かつては、警戒して、敵と見なすことから始まったが、いまは、違う。見知らぬ者に親切にできる。むしろ、ささいな手助けとしての親切は、そういうひとになされる方が目立つ。世界中の誰であれ、同じ人間として、困っているときは、お互いさまだと、相互扶助的な意識を、なんらかの連帯的共同的意識を、みんなもつことができるようになっているのであろう。

親切は贈与であり、利他のところをもつが、それは、ほんのささやかな贈与であり、利他というものはずかしいぐらいのことである。敵意や嫌悪の感情が生じなければ、ささいな手助けには、無心に応じる。おそらく、我利我利のエゴイストで通っている者でも、見知らぬ者から求められた親切には、応じる。相手が自分を親切な人間と評価して、親切を求めてきたのである。当人をエゴイストと知る者はそうしないので、むしろ、感激して、はりきるであろう。その程度に利他であれば、親切はなる。

6. 求めるもの（能力）を持っていそうなひと

優しそうで、ひまそうであれば、親切は請えるのかということ、場合によっては、それでは不十分になることがある。他の種類のひとに親切を請わねばならないことがある。「重い荷物の手助けを」という親切は、いくら暇そうでも老人や子どもには頼めないであろう。困っているその内容にふさわしい能力をもったひとが親切なひととして選ばれることになる。

親切は、手助けという行為を求めているのである。好意や優しさの気持だけでは、どうにもならない。最後は、無愛想なとつきにくそうな相手であったとしても、かれに親切を乞う以外ないことがある。列車の乗換えが不明なとき、優しそうな乗客に親切を請うこともいいが、確かなのは、いそがしそうでも、無愛想でも駅員に聞くことである。なにごとも、その道の専門家がいるもので、求める親切の内容に見合った、それにふさわしいひとが選ばれねばならない。親切は、結局は、困っていることについて手助けを請うのであり、単に他人とふれあいを求めているのではない。単なるふれあいなら、優しく暇そうなひとでいいが、肝心なことは手助けであれば、それができそうにない者は選ぶわけにはいかない。無愛想で冷たそうであっても、暇がなくて忙しくしていても、そのひとしかその手助けに相応しいひとがいなければ、この人に親切をお願いすることになる。

お金が必要な場合は、金銭に余裕のありそうな者が選ばれることは、いうまでもない。困っているひとの求めるものを、あり余るほどもっている余裕のあるひとであることが望ましい。こど

もに、お金での親切を請うことはあまりない。裕福そうな紳士風の者が一番であろう。たばこの火を求めるのに、こどもに親切を請うものもない。やくざに請うこともない。茶パツの「お兄さん」ぐらいが一番であろう。手助けしてもらえることが前提にあって、その視点から親切の相手をさがし、接触しても弊害が少なそうなひと、優しく、ひまそうな者を選ぶのである。

(ほどほどの能力者) 手助けを求めるのだから、そのための能力に長けたものにこれを請うといひのだが、単純にそうはいかないこともある。ささいなことを親切では求めるのであり、しかも無償が大前提であるから、トップの有能者であるより、ほどほどの方が遠慮がなくてよいというような場合がある。

パソコンについて初心者として親切を請うのは、自分の家では、パソコンウィルスも作れる息子にであるが、そとでは、ウィルスの被害者にしかねないレベルのものに聞くのが一般である。無償でやってもらうのだから、専門家に、初級の内容について親切を請うのは、事と状況しだいでは、「馬鹿にして!」ということになりかねない。

ほどほどの能力者に親切を請うのは、自分について知られたくないということもある。初級のパソコンの能力しかない相手なら、自分の無能を恥ずかしがらず、気軽にどんどん親切を請える。深くは考えないこどもになら、恥ずかしがらずに、売春街の横にある教会のある方向をたずねられる。

(それを仕事にしていない人) いくら手助けしてもらうに適切なひとだと分かっているけど、親切を請うてはならないひとがある。それを有償の仕事にしているひとである。列車からおりて、重い荷物をはこんでくれるひとには、それを仕事にしようと控えている「赤帽さん」が一番であるが、これに無償の親切を請うことはできない。

ただし、親切と同じ事柄を、無償で仕事としてやっている場合は、親切な素人よりは手慣れていて頼もしいはずで、大いにこれを頼むことになる。町の案内については、これを親切に任せておくのでは旅行者には不親切なことになるので、公設の案内所とか交番がこれを仕事の一つにしている。この交番や案内所での「道案内」は、だが、親切に属するものではない。かれらには、それが仕事であり、案内する義務・責任がある。そこで親切をいうとしたら、その案内の仕事以外についていうことになろう。交番での道案内は、仕事であり、親切に属さないが、そこで同時に、電話を貸してもらおうとか、水筒に水をわけてもらおう等があれば、それらは、交番の仕事外のことがらであって、それが親切ということになる(もちろん、案内の仕事であっても、仕事(並みの対応)をこえて思いやりをもってする場合は、その分は、親切ということになる)。

7. 通りすがりの者

親切なひととは「通りすがりの者」であるなど、どうでもいいではないかと言われようか。だが、これは、親切と親切な人間のかなり本質的な特徴になる。親切は、たまたまに生じている困

惑に偶々そこに居合わせている余裕のある者がささやかな手助けをすることである。親切の場は、偶然的なものであり、そこに居合わせている他人が即興にこれに応じるのである。行きずりのひとが親切にするのである。親切の相手の条件は、なにになるかということで不要なものを捨象すると、友人でなくてもいいし大人でなくてもいいしと、すべてを捨象して最低限必要なものとして残るのは、とにかく、その場に居合わせていなくてはならないということぐらいである。つまりは、純粋な親切は、通りすがりの者がするのである。

親切は、これをはじめから予定することは、あまりない。困ることになると分かっている場合は、予め準備する。「花粉情報」で鼻水が相当に出ると予想できれば、困らないように多くのチリ紙を用意し、道が分からないのなら、予め地図を読んでおいたり、これを持参する。かりに自分では準備できないとしても、予め分かっていることには、ボランティアを頼んでおくとかの手はずを整え、親切を請わなくてもよいようにする。親切に残されているものは、たまたまその場で生じるささいなアクシデントの類いのものとなる。アクシデントも大きなものになれば、専門家に頼むことになるから、ほんのささやかなものを親切では請うのである。

(たまたまその近くに居合わせたもの) 親切の内容は、たまたま生じた、ささやかな困惑に対するものであり、周囲にひとがいなければ、我慢し、なしで済ませられるようなものである。たまたまそばにひとがいるので、即興にと負担のない手助けを求めるのである。負担でないからこそ、そこに居合わせた赤の他人に無償でこれを請えるのである。

いくら優しくてひまそうだからと、三里先の山寺の良寛和尚に電話して、駅構内のどこかにあるらしい手まり売場の案内に来てくれないだろうかと親切を請うても、おそらくは、よい返事はもらえない。若干ふさわしくなくても、その同じ場所にいあわせているひまそうなサッカー少年たちに親切は請うべきである。親切は、たまたま生じる困ったことについて、その現場で、そこに居合わせている、通りがかりのひとに請う。是が非でもというものは、自分で予め用意したり、専門家に登場を願って本格的に取り組んでもらうことになる。かりに親切と時間的には差がないものを無償で手助けしてもらおうとしても、計画的に取り組む、あらかじめお願いしていたようなものは、奉仕とかボランティアといったものに属することになる。たまたまに生じる困ったことについて、通りすがりのひまなひとが、たまたまに手助けするのが純粋な親切である。親切は、ささやかな手助けを行きずりのひとに請うのである。

新幹線では、見知らぬ者に席を譲ることは一般的ではないが、ときには譲る。負担の大きさは、ささやかな親切を超える。負担の大きい無償の手助けは、多くの場合、奉仕とかボランティアと言われるものになる。しかし、新幹線で席を譲る場合は、負担は大きくそれはボランティアと変わらなかったとしても、奉仕でもボランティアでもなく、やはり、「親切」と言われる。その活動が奉仕やボランティアといわれるものの場合、予め計画して本腰をいれて取り組むものになるからであろう。親切は、たまたまに生じた困惑に、偶然にそこに居合わせて余裕ある者が即興的に

手助けをするのであり、計画的な営みではない。新幹線で席を譲るのは、負担は大きすぎるのであるけれども、たまたま行きがかりとなった者が即興的に応じるという形式において、ボランティアでも奉仕でもなく、「親切」と見なされるのではないか。

(近づこうとするひとの場合がある) 親切にするひとが行きずりの他人であるということは、親切にされる人も同一で行きずりの他人になるはずである。だが、そうでないことがある。親切にする相手に故意に近づくために、行きずりを装うことがある。親切は、怪しまれずに他人に近づける数少ない機会である。接近して懇意になるきっかけをつかめるので、親切を利用するのである。そういう下心をもったひとが親切をするために心がけることは、第一に、その目的とする相手の近くに居合わせるようにすることである。「赤ずきんちゃん」に接近しようと、「親切」をねらったおおかみは、何食わぬ顔をしてたまたまに出合ったかのように装って、通りがかりの道端に待ち伏せしていた。近くにいるようにしないと、親切にはできないからである。

たまたま近くにいることが固定している他人もある。隣近所である。わざわざに隣になるのを選ぶということはまれで、たまたまの赤の他人同士が隣近所になるのである。ここでは、親切が交わりの形式として尊重される。親切は、ささやかで表面的な交わりであり、他人であることを超えないで、しかも、好意的に贈与的にふるまうのである。隣同士でぎくしゃくしないためには、好意の表現としての親切は、重宝である。

8. 不親切な親切な人

今の時代、余裕のあるひとはたくさんいて、困っているといえ、多くのひとが親切にしてくれる。世話好きもたくさんいる。こういう状況下では、自立心にとぼしい依存人間は、過度にひとに頼っていくことになりかねない。親切は控える方がよい場合が多くなっている。

親切は、独立した個人のあいだのささやかな手助けなのだが、この手助けが無闇になされると、つまり過度の親切は、これに依存して生きる寄生虫的存在を生み出すことになる。どこにいても、いつでも、誰かが親切にしてくれるということで、親切を当然と見なして、これを頼りにするパラサイト(厄介者)をつくる。

登山するとき、自立した人間なら、天候を考え万全の装備をして入山する。暴風雨になっても、自分で対処することを当然とする。だが、最近、世の中、余裕があつてみんな親切なので、誰かが親切に手助けしてくれるだろうと安易な気持ちで携帯電話を片手に山に入る。風雨への備えもなく、食料の予備もなく、少し難儀すると、安易に頼ってタクシーがわりにとヘリコプターを呼んで平気である。親切にすると、ますます甘えて、自分での準備をますます怠るようになる。ごみもボランティアが回収するから平気で放置する。

(不親切が親切になる) そういう意味では、ほどほどの不親切は、必要なことかもしれない。自立精神をさまたげ、怠惰をすすめるような親切は、これをひかえるのが、それこそ深い思いやり

であり、大局的な親切になるということである。

JR西条駅で、「ちょっと、おにいさん、広島大学はどこにあるのさ」とたずねるようなパラサイト族には、「あつこに、案にゃあ板があるけえ、自分で調べんしゃあ」と親切に無視するか、親切に駅横のブルーバールの始点まで案内して、「こりよお、まっすぐに行きゃあ、ええんです」と一里あまり山越えの道を歩くことをすすめ、怠け心をしっかりと反省させるべきである。

そうしないと、いずれ、北海道の原野の無人駅に立って、「あらあ、この近くにはホテルはないのお」と見回して、北きつねの嘲笑の目にしかであえない、その遠因を作ることになる。そういうひとには、不親切こそが、親切なのである。安易に親切なひとは、自立をさまたげて、いずれは当人を周囲から迷惑がられ嫌われる寄生虫にしてしまうから、根本的には不親切ということになる。

(モットーとしての不親切) むやみには、親切にしないし、親切にされることもない人がある。

「小さな親切、余計なお世話」と不親切をモットーにするひとである。独立自尊のひと、孤高に生きようとするひとは、世話という依存をできるだけ避けようと心がける。

親切は、なければならぬで済ますことのできる、行きずりのたまたまのささいな世話であり、交わりのわずらわしいひとは、そういう余計なものは、なしですませたいと思う。むやみに嗅ぎまわり吠えまくる犬の生き方に与する世話好きやお節介屋の敵である。猫の生き方を是とし、ほえつく犬どもを「おみやあらの、お世話にゃあ、にやりとおは、にゃあ」と屋根のうえから見下すのである。こういう不親切を生活上の信念とするひとは、山奥の広島大学も北海道の原野の無人駅から一番近いホテルも自分で詳細に調べて自分で処理し、困ることがなく、ひとには頼らず迷惑もかけない。

(『HABITUS』(西日本応用倫理学研究会) 通巻 11 号 1~17 頁 平成 16 年 11 月)

第三章 親切心—他人に対するあたたかな思いやり—

1. こころ優しさ、ささやかな思いやり

親切心は、困っていたり求めのある他人に対して、やさしい気持ちを持ち、これに同情し、その解消にささやかな援助・手助けをしたいと、好意的に、あたたかにこれを思いやることであろう。

親切なひとは、やさしいひとである。「やさしい」とは、おだやかに接して、こまやかに配慮することである。鋭く厳しくかかわってその対象を傷つけることがないようにと、大切にあつかい、やわらかに慈しみの気持をもって接するのである。だが、優しいだけでは、親切にはならない。

優しい試験官は、厳しく問い詰めることをしないで、答えやすいようにたずね、穏やかに受けとめる。親切な試験官は、やさしさに加えて、答える際に、これを導くように手助けをしてくれるひとである。やさしく手助けをするのが親切である。親切心は、やさしい慈しみの気持を持ち、利他の気持をもちつつ、困っているひとの手助けをしようと心がける贈与的な愛のこころをもつ。

(深い愛ではない) 親切心は、慈悲の愛とは違うところがある。慈悲では、自己犠牲の献身をいとわないが、親切は、そこまではしない。ささやかなものにとどまる。自己の余裕・余剰を贈与しようというにとどまる。親切は、自己をささげるような大げさな愛ではない。ささやかな好意にとどまる。自己は、そのままに維持・保護しながら、余裕を分かち与えるのみである。

見知らぬ他人への親切は、このひとをあくまでも疎遠な他人にとどめながら、かつ好意的な気持ちをもって、その困窮等の手助けにと余裕分を贈与するのである。慈悲に比して、つめたい感じだが、それはそれでよいのである。見も知らぬ者同士であれば、その贈与は、余剰分ぐらいが、相互にとり安心できるものになる。

親切を乞う者も、ささやかなものに留まるとの暗黙の前提があるから、これを求め、受け入れるのである。道案内を乞うただけなのに、ついてきて、以後、離れず、「不明のことは、なんでも聞いてくれ」とつきまとうとか、ちょっと席をゆずってもらう親切を受けたのに、献身的になって「一生を貴女にささげます」といわれたりするのでは、うかつに親切を受け入れることはできなくなる。

親切は、ささやかに限定的に、ごく表面の手助けをする軽いものだからこそ、気楽に見知らぬもの同士のあいだで即時に即興に可能となるのである。もっと援助してほしいと思っても、それを遠慮するのが、親切をうけるもののマナーであり、もっと近づきたいと思っても、遠慮して、他者としての距離を維持し、一線を越えないのが、親切にする者のマナーである。

どんな社会にも、暗黙に了解し承認しあっている約束ごとがある。軽い接触に限定することを相互に了解しあっているのが現代の親切関係である。その一線を越えるいずれの無遠慮な者も、

「なれなれしい」あつかましい者とみなされて、親切関係を断られることになる。

(深くならないように気遣うのも、親切である) 親切なひとは、ひとへの思いやりに富むひとである。親切関係の中の思いやりは、ふつう親切が軽く表面的なふれあいに留まるから、その関わり方にも気をつかわねばならない。あまり深入りはしてはならないと思うのも親切のうちである。冠婚葬祭につつむ「お金」の額は、相手との関係、つき合いの程度、お返しの負担等に配慮しつつ、多過ぎず少なすぎずと、気遣う。親切の仕方、深からず、浅からずとの気遣いを必要とする。本来、純粋な親切は、行きずりの他人同士とするものとして、この他人の間柄を超えないようにと、つまり、深くならないようにと気を使うこととなる。

この他者距離の気遣いは、親切を受ける方でもする。この程度なら、お願いしても差し支えなからうかと気遣うのである。そのことを親切なひとは、よく思いやれるから、道案内などでは、反対方向に行くつもりだったとしても、「ちょうど、そっちの方へ行くところです、近くまでご案内しましょう」といったりするわけである。

(同じ利他の「思いやり」だが、誠実の「思いやり」とは違う) 親切は、思いやりに富む。相手の気持を思いやり、やさしさと贈与の気持の「思い」を、あげる＝「やる」のである。

思いやりというと、誠実さでこれが目立つ。だが、親切の思いやりとは少しちがう。誠実さは、自身には応えるべき(つぐない等の)責務があって、その相手の思いをしっかり受けとめ、心から尽力しようという無私の思いやりからなる。誠実の思いやりには、温かさはない。借金を返すときの誠実さには、あたたかい贈与の愛など不遜で場違いである。だが、親切の思いやりは、借りがあるわけではなく、ささやかではあるが、はじめから一方的な贈与としてあり、自発的で任意のものであって好意でつつむ温かさがある。

2. ささやかな好意

親切を受けるとき、「ご好意に甘えて」という。親切なひとは、その相手に好意的と理解されている。嫌いな遠ざけたい人や、憎悪し危害でも加えてやりたいと思っているひとには、親切は発動しない。親切においては、近づくことが嫌でなく、むしろ好ましい相手と見なし、親しみを感じて、その相手のためになるようにとふるまうのである。

感情的には、好きだとか好意をいまくことは全然なくて、ひたすらに善意に始める親切もある。とっさに求められたことへの反応には、おそらくは、無心に親切の対応をもってし、感情的にどうこうというひまはない。しかし、不愉快に思った相手には親切心は発動しにくい。親切は無心に行うとしても、嫌悪や敵意が生じないかぎりでのことである。

ボランティアは持続的でしっかりした意志が必要で、好意よりは「善意のボランティア」であるが、親切は、しばしばとっさに応じる即興のもので、計画的意志的なものではなく、より直接的感情的な反応であろうから、善意よりは「好意の親切」が一般的である。法律用語では、悪意が

なければ、「善意」というように、親切にして敵意等がなければ、そのところは好意に、親切は「ご好意にあまえて」とまとめられることになるのであろう。

それに、善意のみから始めたとしても、親切の遂行にともない、その親切関係において、親切には好意が帰ってくるから、好意的に反応しかえし、相互が好意的になっていくものでもあろう。親切のところは、好意でもって代表されてよいのではないか。

愛は、一体化しようという感情であり、意思・欲望であるが、自己に一体化しようと奪い取る強奪的な愛と、自己を愛するものにと一体化し与えていく献身的な贈与愛に区別することができる。親切は、贈与愛のはずれに位置づけることができようか。

親切は、手助けをして自身を相手の手段とするもので、相手を手段とする強奪的な愛とは、その根本精神が反対である。ただし、親切では、贈与の相手に好意をいだいて、好きでこれを引き寄せたいとすることからは、強奪的な愛の面があるともいえる。とはいえ、この場合でも、親切自体は、贈与愛である。「好き」という愛は、相手をひきつけるために、ときに贈与愛の親切を利用していく。

(好意と親切の範囲は、ほぼ一致する)好意は、ささやかにふれあう親愛の情である。その相手を好ましく思い、価値ある存在と見なすのであり、交わりたい、贈与したい、ためになることをしてあげたいと思うものである。ただし、傍観者的に他者としての距離をとったままでのことである。

異性愛についても「好意をいただいている」という。それは、一体化を求める愛になる手前であって、なお、そうなることを欲するまでには至らないもので、そういう方向に向かって発展途上にあって、好きでそばに一緒にいることを求めなくもないというような状態であらう。

われわれ（日本語）の「好意」と「親切」は、かなり重なる。動植物にはいわず家族にもいわず、他人にのみ言う。だが、親切心は、相手が困っていなくて働かないけれども、好意は、困っていなくても持ち続けるし、逆に親切にしてくれる相手に対してもいさぐ。

(好意は、かすかに触れ合うのみ)親切関係は、わずかに接した一点で、赤の他人同士が交わるのであれば、相互の独立的行動をさまたげるような深いものであってはならない。

親切では、ささやかにのみ愛の気持ちをさそわれる好意にとどめなくてはならない。それは、なお、深みにはいることを相互にしっかりと自制した親愛の関係である。

「このご親切は一生忘れません」と他人にいうが、その後は、一生、身近には付き合う気がないから、そう気軽にいるのである。観光のバスガイドさんの評価は、「親切なひとじゃったのお」である。二度とあうことのない他人である。

(愛は、多様で、濃淡に大きな違いがある)われわれの愛は多彩で、完全に一体化を求める濃いものから、ささやかに非敵対的な近さにある程度のものまでと濃淡に大きな違いがある。水素と酸素がひとつの容器でなかよく混ざり合うような、淡い愛から、燃え上がっておのれを失い合体し

てしまう濃い愛までがある。

淡い愛の好意では、相互は、傍観者的な他者としてありつつ、自己を失うことのない程度に贈与しあい気に入り引き合うが、濃い家族愛のようなものになると、合体していて、愛する者のことを自分のこととし、なにかあると傍観者にはとどまらず当事者になって献身し自己犠牲をいとわないことになる。

親切のそれは、見知らぬもの同士のそれとして、ごく薄い愛がふさわしい。「親切」は、「好意にあまえる」ことにとどめられるべきなのである。

家族のうちの愛は、濃い愛であるが、隣近所との付き合いは、ごく薄い好意的なものにとどめられる。愛は、濃ければよいというものではない。その関係に固有の濃度がある。ものごとには、適度というものがある。多くても少なくても度外れになると変質・変貌してしまう。卵をにぎるには、強すぎると壊すし、弱すぎても、落として駄目にする。適切な度合いというものが肝要である。愛も似た事情にある。

近所との関係は、あまり、深入りしてはならない関係である。濃い愛は、禁物である。かといって、無視したり、嫌悪しあうのも、やすらぎの我が家の隣りという近い関係にあつては、避けたいところである。好意的であることが理想である。

あくまでも他人であることを前提にしそれを厳守しつつ、親しみの気持ちをもち、相手のためになることに与したいという、市民社会のささやかな同胞愛を表現し好意的な自分であることを示すために、ひとは、ささやかなふれあいである親切を利用する。親切は、そのみでは、深みにはまるものではなく、ささやかな好意にと相互が自制するから、永遠に他人で近所という関係には、好都合である。

3. あたたかさ—冷たい商品社会のぬくもり

現代社会は、自立した個人からなり、私的所有のもと、冷たい打算の等価交換にしたがった交わりをもつ契約社会である。家族・血縁のそとにいる他人には、当然、その契約的な原理が冷酷に貫徹される。その冷たい打算の交わりのなかにあつて、親切は、ささやかではあるが、擬似家族的に振る舞い、資本制の原理を超えて、この他者にあたたかな無償の贈与・手助けをしようというのである。

商品社会の等価の有償の交わりのなかで生活をしているのではあるが、その余裕のところ、この冷たい関係を停止して、親愛の間柄にある者や家族のあいだにのみ見られる、無償の「贈与」をしようというのが、親切であり、ボランティアである。

親切は、打算を越えて、ささやかではあれ慈愛の心をそそぐのであり、ひとの温もり、あたたかさがある。親切の漢字は、その「親」も「切」もびたりとふれあうことを意味している。家族の触れ合うあたたかい親密さの心が、親切の好意のうちにはある。

(冷たい資本制社会を補う、あたたかな好意) 親切は、冷たい資本制的市民社会ではなく、これと対立的な共同体的な心情にささえられていると考えたくなるが、かならずしもそうではないのではないか。われわれのささやかな親切は、あかの他人、見も知らぬ他者を前提にする。自立した個人の等価交換的な契約関係からなる社会を前提にし、そのつめたい隙間をうめるあたたかな無償の贈与として、われわれの親切はなりたっている。

共同体では、他者距離を保った、ささやかな親切は、色あせたものとなり、家族がそうであるように、濃い助け合いが、超親切が（したがって現代からいうと余計なお世話・お節介・干渉が）顕著となっていたように思われる。

ささやかな親切のほのあたたさは、冷たい打算の市民社会であるからこそ、感じられるのであろう。お金で裁判の無罪判決まで買える拝金主義社会の米国に、「親切運動(kindness movement)」がある。打算の資本制商品社会において、その有償労働の原理を越えた無償のボランティアが盛んであるように、冷たい打算の市民社会であるからこそ、あたたかい親切が恋しく、意識して親切でありたいと、これを社会運動にする人たちが現われるのであろう。

西欧では、個人主義が発達しているからであろうか家庭でも各人ばらばらの傾向がある。しかし、ひとは淋しいのであろう、夫婦は、異常といってよいほど、一緒に行動し、公式の場でも夫婦が伴いあい、しかも平然と手を取り合って平気である。あるいは、日頃は個人主義でひとりであるのに、何かあるとパーティーだメッセだと寄り集まり、クリスマスなども、こどもはそっちのけで、いい年をしたものが群れ集まって市をうろついている。われわれから見ると異様な光景である。自立した単独者には、なりきれず、他方では、手を取り合い、好意的にやさしくしたいことになるのであろう。

(親切は、近代の産物か) 他人への好意である親切は、近代の市民社会に開花したものかもしれない。それ以前は、そういう見知らぬ者には、警戒し、威嚇しあうのが常であったろう。なわばりに入ってきたものを攻撃し追い払う動物のようにである。

家族員や共同体員としてではなく、自立した個人として、ひとが、万人とともに共存することを、対等の契約関係からなる市民社会は可能とした。等価交換原理のもと、敵対しあう者のみか、悪魔でとすらも共存できるのが、近代の資本制商品社会である。そして、この打算の契約社会の隙間をうめ、自由な個人のあいだにふれあうささやかな潤滑油として、親切が機能している。親切は、現代社会において、万人が相互に人として友好的に好意的に生きることの可能性を実感させるものではないか。

共同社会 (Gemeinschaft) と市民社会 (Gesellschaft) という区別をすることがある。近代の個人主義の自立した市民からなる社会にのみ、表面的接触の親切は輝くのであろう。かつての共同体 (Gemeinschaft) では、各人の自立度は低く、非自立に依存し合い、相互扶助で深く干渉しあっていた。村落共同体の成員たちは、ささいなことにも口をはさみ、プライバシーも個人の自

由もなく、ことあるごとに干渉しあうのが常である。こころの底までをぴたりと密着して「親・切」に監視しあい、個人として自由に生きようとするものには息が詰まるような、超親切的な社会である。

近代市民社会は、個人の自由が尊重される不干渉の社会である。否定的には、放置・放任される、冷たいといえば冷たい社会である。冷たいから、ささやかな親切も、あたたかいものと感じられるのである。

(あたたかさ、つめたさ) 親切のあたたかさは、手助けしてもらい相手を感じるものだが、それにはとどまらない。困っている者へ親切にする者は、しばしば相手に「同情」することになり、その感じるあたたかさも同じく反射してくる。その笑顔に接すれば、嬉しくなる。親切のあたたかさが、「親」「切」に接しあった相手に伝わるとともに、相手のぬくもりがこちらにつたわる。相互が、ひとのやさしさのぬくもりを感じあうことができる。

「あたたかさ」は、保護的、贈与的であることを感じる時にいう。われわれは、温血動物として、あたたかいものが必要で、あたためるもの(防寒の衣服や家等)はありがたい贈与である。相互が身をもって保護しあうに、肌を接して互に体温のぬくもりを感じることもある。北風に凍った身体は、暖房の家に保護を感じ、あたたかな風呂に極楽を感じる。「ぬくもり」が個人の原初的体験として保護・贈与となるのは、多くは、母親に抱かれたときのあたたかさ、あるいは、母体にあったときのそれに由来しているのであろう。

「冷たい」ことは、温血動物のわれわれには、生否定的な状態につながる。生があたたかさであるから、死は、冷たくなることとなる。冷たいことは、非保護的で、冷酷無残に連なる。冷酷無残であることとなる「冷たさ」の、その原初体験は、母体から切り離されて冷たい空気にさらされ、そのつらさに「号泣」する出生の第一声にある。

親切は、贈与としてあたたかなのであり、かつ、ばらばらの個人の冷たい社会のうちで身を接しあうこととして、身体的なあたたかさを感じるのでもあろう。

(なごませる) 隣近所に親切にするのは、「好意的であって、敵意も悪意ももっていない」ことの開示・ディスプレイであるが、見知らぬ者への親切も、非敵対関係の顕示として作用する。疎遠な間柄にあって無視を強いられる日常のなかでの、非敵対友好関係の顕在化は、ひとを相互に和ませる。

現代人は、干渉しないようにと相互に無視しあっているが、それは、敵対し不愉快だからそうしているわけではない。自立した個人として尊重しあい、他者としての距離を保とうとしているのである。ささやかで、軽く表面的にのみ接触する親切は、このとき、好意的であることを示し、その場をなごませることができる。

親切は、「微笑み」と同じように、敵意をもっていないということの表明となる。無償の手助け・贈与を、敵意をもつものにするはずがない。ささやかな親切は、手助け・贈与であるより、心の

うちにある好意そのものの表現を主とすることがある。親切は、ぎすぎすしがちの自立的個人の現代社会にあって、その個人のあいだの潤滑油の役をする。

(与える心地よさ)「親切をして、気持ちがいい」という。さわやかに晴れわたった感じであろう。せこい打算の等価交換から離れて、赤の他人に無償の手助けをしたのであり、欲得を離れていて、無欲のさわやかさが感じられるのである。

贈与であるが、負担はちいさい。物惜しみするほどのものを贈与したのではないから、あとで後悔することはない。贈与の気持ちよさだけが残る。しかも、困っていた相手は大喜びしているのであり、自分の小さな贈与が大きく感じられることもある。

また、日頃は、他人への「贈与」というと、なんらかの下心があつて醜さ・汚さがあるのだが、親切は、しばしば突然、なんの縁もないひとから求められて、利己を思う暇もなく即興に応じる端的な利他的行為である。暖かいのはいいが、じめじめしてうっとうしいというのではなく、湿り気がなくて、さっぱりしていて、さわやかである。

さらには、贈与は、優越の場からなされるので、なんらかの優越感があることもかわる。押さえつけられた重々しさを抱く劣等感と反対で、上に位置して、風通しもよく軽やかで、さわやかなのである。

4. 自発性

親切では、相手の困っているのを見て、手助けをと自らがすすんで好意的にかかわっていく。自発的なものであって、相手や他の者から強制されるものではない。

感情的には気がすすまないのだが、やらなくてはならないことだから、やむをえないと思うようなこともある。その親切は、なすべきこと「当為 Sollen」となる。外的な強制ではないが、内的強制をもつての自発的な行為となる。好意のいだけるような相手でなければ、その親切は、善意に発する親切である。

(親切は、義務ではない)親切の手助けは、しないことの許されない「義務」ではない。相手の困窮に責任があるのなら、これを援助しないことは、許されないが、親切にする者には、その義務・責任はない。ただし、恵まれている自分がやらないでだれがやるんだ、「やらねばならない (Muessen)」と自覚すれば、自身においては、その親切は義務意識で始めていくものとなる。

親切は、貸し借りなしのところで、無償の援助をするのであり、相手には権利があるわけでもないし、親切な者に義務があるのでもない。

親切は、強制されない。無償の贈与である。自発的なものであり、自由なものである。やくざ風の男から、「そこを、どけんかい！」と脅されて、席をゆずる場合、あとでまけおしみに「親切にしてやった」というとしても、それは、親切ではない。親切は、自発的に「する」ものであって、強制・脅迫をもって「させられる」ものではない。

親切は、要請され、請われることも多い。強要されることもある。「電車賃が、十円たらない」と困っているひとから、十円を請われるとき、自発的に好意をもって応えるなら、親切である。だが、脅迫されて無理やり出す場合は、脅しに屈したのであって、親切にしたのではない。その間に「親切にさせられた」という領域もありそうだが、親切であるかぎりには、本来的には、する・しないの自由を本人がもっていなくてはならない。

自由な親切といっても、お節介やよけいなお世話では、逆に、受け手の方が、親切にされない自由をもつ。望んでもいないことを親切にするのだから、迷惑で不愉快なものを押し付けているのであり、被害者として、これを断る自由をもつ。

(親切は、しなくていい。あくまでも、任意である)「不親切だった」からと、逮捕されて「死刑」になるようなことは、わが国ではない。親切も不親切も、自由である。各人の自発性は、しない自由をもって、任意であることをもって、真に自発性となる。

親切は、小さなボランティア（自発的なもの）である。無償労働のボランティアが強制されるとしたら、それは、ボランティアではなく、単なる強制労働である。親切も、しない自由があつての親切である。

親切は、義務や責任に追い立てられてするものではないが、することは、賞賛される善行為である。感情的には気がすすまない場合でも、これをなすべき善・正しいこととして、自己の怠惰な感性を強制して自発的に親切を意志し実行していく。こういう親切は、ささやかではあるが、当為(Sollen)であり、地についた身近な理想として掲げられるものである。

世話好きは、楽しみで親切をすすめていくのだが、そうでないひとは、楽しみではなくても、自己の良心・理性を安堵させ、ひととしての誇り・自尊心を満足させるために、自主的自発的に、親切へと自らをかりたてていく。

(自発的だが、要請に応じていることである)親切は、相手の求め・困窮があつてのことである。そのことをふまえて、これに応えるものである。つまりは、親切の自発性は、まずは、触発され、方向づけられているのであり、受容性・受動性を前提にもつ。その上での自発性である。要請を引き受けるかどうかの自己判断にその自発性ははじまる。

親切の端緒をなす、その受動性は、親切が方向を過たないためにはしっかり意識しておく必要がある。お節介屋はいうまでもなく、世話好きにしても、このことを軽視しがちなのである。求められ請われてもいないのに、親切を押し付けるから、「いらぬお世話」「余計なお節介」と嫌われるのである。

5. 主観性・思い込み・行き違い

親切は、しばしば見も知らずの他人に、たまたまにかかわつてする、ごく表面的な交わりであり、その内心については、想像するにとどまり、そのため、主観的な思い込みが生じやすい。

親切なひとは、やさしく思いやりに富むから、ときには、ほどあいかわからず行き過ぎて思い入れが強くなり、相手と行き違いを生じることがある。

(思い込み)「困っている、援助してほしいと思っている」と想像し、そう思い込んで親切にするのだが、相手からは、「頼みもしないことをして、迷惑な」と断られることがある。「思いやり」は、相手の思いにあわせるが、「思い込み」は、無根拠に自分の思いに固執するから、相手のためになることは、少なくなる。

もちろん、これは、善意からでていて、親切なひとが、気配りに富み、思いやり豊かで、ひと思いだからなることであり、その精神自体は、買わなくてはならない。ただ、もう一步踏み込んで、深く気遣い、「迷惑だ」と思っているところまで配慮するのが、一層の親切ではある。

ときには、断られても、「きっと、遠慮しているんだ」と思い込んで、贈与の行動を続ける。相手がこれに根負けして、「ささいなことだし、我慢するか」と受け入れることになると、「やっぱり、遠慮していたんだ、いいことをした」と自己満足する。

お節介屋は、思い込みがつよく、主観的で、自分の都合のいいように解釈をする傾向がある。親切かお節介かは、同じ行為に対する解釈のちがいである。お節介屋は、自分では、たしかに親切をしているつもりである。

(行き違い—だが、折角の好意だから、断れず)「ありがた迷惑」ということがある。親切の気持は、その好意はありがたいことで、それとして感謝するが、その親切の行為自体は「迷惑」ということである。

むげに断ることは、折角の好意に角を立てることである。贈与の内容自体は、迷惑であるとしても、その親切なところが一番の贈りものなのだとすれば、ささいな迷惑は、我慢するのが、親切への礼儀ただし振る舞いになるうか。

親切は、無償の援助をする誇らしい立場に立つ。ささいな手助けなのだが、相手には大いに助かることで、感謝は、その大助かりの思いからなされる。親切にした者は、優越意識を満足させ、よいことをしたと、すがすがしい気持ちになる。

親切は、こどもにもでき、日頃は役立たずなのに、ひとに大いに役に立って、大満足ということになる。「親切は不要」とそっけなくするのではなく、親切にされる者も、この辺に気を使う優しいところをもっているものでありたい。

見も知らずの者同士は、好意的友好的な気持をもっている、それを示すきっかけはあまりない。だが、一方からの親切でそれが可能となる。親切をされるという、折角の友好の手は、少々面倒でも、しっかりとにぎりかえす必要がある。親切にするチャンスがなければ、親切にされるきっかけをつくるのも手である。

(人柄としての親切) 世話好きやお節介やは、親切がそのひとを作っているといってもよい。そのひとの人柄を示すことばに、「誠実な人」「慈悲のひと」というのと同様に、「世話好き」「お節

介屋」という。自分の余裕分があれば、これをできるだけ利用しひととの結びつきに使うのである。他人とそう簡単に関係をもてるものではないが、親切はこれを可能とする。むしろ、赤の他人にするのが純粋な親切ですらある。親切は、なんとでも結び付けられる万能の接着剤である。ただし、接着力は、弱い。世話好き・お節介やは、多くは、この意味での親切なひとであるが、なかには、労を厭わず世話の中身を濃くしていく世話好きもいる。周囲から重宝される人気者である。

お節介やは、主観的な親切人で、自分が親切と思っていることが親切だと誤解する傾向が強い。親切は、相手の困っていることで手助けが欲しいということにするものであるが、その肝心の相手の気持ちは、あまり考えずに、自分の利他の気持치를優先するひとである。自分が日本酒が好きなら、相手も当然、これが好きだと思い込んで、これの嫌いなひとにすすめる人である。親切を押し付けるひととなる。お節介やは、当然、周囲からは嫌われがちである。

6. 親切心への否定的評価

親切心は、求めをもち困っているものには、ありがたいひとの好意であり、ひとのぬくもりである。見知らぬ者同士の交わりもこの親切によって一歩を踏み出す。ささやかな好意の親切が良好な交わりを可能としてくれる。

だが、親切は、余計なお世話になったり、恩着せがましいものになったりして、否定的な場面ももつ。

他人から干渉されることなく、独立独歩で生きることを是とする者は、親切は、ほどほどがよいと、これの価値を、低く評価する。

「干渉」とは、求められてもいないのに、よけいな口出し・手出しをすることである。求めがあるのなら、それは、援助であり親切である。同じ贈与的振る舞いが、その相手の気に入れば、援助であり親切なことで、気に入らず迷惑と感じれば、それは、干渉であり、お節介となる。「内政干渉」とは、政権をもっているものがいうことで、抑圧されている者からは、「解放」であり「支援」「救援」と評価されることも少なくない。

親切は、ささいな、なくてもどうということのない手助けだともいえる。自立心旺盛なものには、「余計なことだ」と拒否される。親切な干渉を犬は喜ぶが、ねこは嫌う。ねこ的な心性の者かという、親切は、赤の他人からのものであれば、受ける理由のない贈与であり、それは、不愉快な干渉である。よけいな世話である。

ただし、「親切」という語自身は、否定的に使用されることはない。日本語は、ものごとを客観的に叙述するとともに、これを価値評価した表現にも富む。ひとつの言葉・概念そのものが評価を含みもっている。親切もその一つで、正義や情熱等と同じく、その行為自体は常によいものとみなされているプラスの評価語である。そのため、いやな「親切」は、これを余計な「お節介」

と言い換えなくてはならない。

(**当てにすべきではない**)ひとの親切をあてにして生きることは、親切を高く買う者でも、これを否定することであろう。基本的には、ひとをあてにせず、自分で生きていかねばならない。

親切をあてにせず、困ったことにならないようにと自立的に自分で処置し、あるいは、制度的に対応できるようにすべきである。道案内も、それを不要とするように予め自分でしっかり地図を読んでおくべきである。また、道案内が必要なところでは、しっかりした案内板を出すべきで、親切を当てにさせてはならない。親切は、たまたまに受けることができるのみである。親切が不要の制度・対応をとっておくことが必要である。

(**親切の優位が鼻につく場合**)親切は、無償の援助であり、一方的な贈与である。対等を求める者には、その親切を贈与される劣位に、こころよからぬものを感じることもある。

同情と同じように、親切は、他者距離をもったままであり、傍観者にとどまる。自分たちの優位の立場をすてるつもりはない。同情も親切も、(わが国では) 家族にはいわない。親切では受難や困惑の当事者そのものにはならないのである。その親切や同情に、優位から見下すような目つきがともなっていたとすると、断って当然であろう。

ひとは、貸したものは、いつまでも、忘れない。借りた方は、忘れても損はないので忘れがちである。エゴイストであればあるほど、損得に敏感で、贈与であっても、損をしたことには間違いないから、いつまでも、「やった」「してやった」としつこく言うことになる。そういうひとに限って、してもらったことは、人並み以上に忘れるのが上手である。

親切は、自分の余裕分を贈与するだけのものであり、贈与というもおこがましいぐらいのささいな負担にすぎないが、恩着せがましい者は、なにかあると、「あの時、親切にしてやったのは、私だ」といつまでも反復する。その恩着せがましい親切へのお返しには、ささいな負担に見合うものではなく、困っていたその困窮の主観的な大きさに、サラ金の高利率をかけたものを返すことを要求する。それをしないと、「親切にしてやったのに。恩をあだで返す」などといわれることになる。

こういうひとの親切は、あとが大変だから、なるべく、断るほうがよい。かりに親切にすることがあったとしても、親切にはされないように注意しなくてはならない。

口にはしないが、多かれ少なかれ恩着せがましきは、万人がもっているのだと思うと、親切には、なるべくかかわりたくないという気になってくる。

(**孤高を好む場合**) 求めをもっているか困っているかどうかは、主観的な判断であり、また、仮に困っているとすると、ひとに援助をしてもらいたいと思うとは限らない。「そんなことに余計なお節介は不要」という声も、孤高を好むひとからは、聞こえてくる。こういうひとは、困っているそぶりをみせないし、第一、困るような状況をつくらない。

親切は、過度だと、寄生的人間を生むことになるが、過小だと、味気ない社会を作ることにな

る。打算の義務権利関係にしたがって、余計なことはしないで、かかわりをもたないようにと、無視しあって生きることになるのは、どんなものか。

雑踏のなかを、だれもが知らぬ顔をして行き交う。セルフサービスで、レジでも一言も会話することなしで済ませられる。人間同士のなまの交わりはなくなっていく。干渉でも、お節介でもよい、交わりを求めたくなり、前近代の過干渉の共同社会を懐かしむひともし少なくない。

親切は、現代の個人主義を肯定し他者距離を尊重しつつ、ささやかに生身の人間同士が触れ合うものである。その機会は、どこにでもころがっている。ひとは、群居動物である。交わりをもとめる存在である。自立した個人に干渉しないささやかな触れ合いとしての親切は、大切にすべきことのようにも思われる。

(親切の限界を自覚すること一本当に「小さな親切」なのである)親切は、社会をおだやかな住みやすいものにする。だが、場合によっては、親切は、社会的な不公正を追認・糊塗する偽善でしかなくなることもある。独裁者とその一族が慈悲深く、親切な人々であるのは、独裁の巨悪を隠蔽する「いちじくの葉」でしかない。その国民のあいだの親切も、冷酷な独裁社会を住みやすくして、独裁体制を側面から支えるのだとすると、この親切は、ありようによっては、そういう場合のボランティアや奉仕活動ほどではないとしても、根源的に「いらぬ世話」、否、犯罪になるというべきであろう。

親切は、冷たい社会のその冷たさそのものには、関与しない。これを放置したままである。場合によると、親切は、その冷酷な社会にひとびとを我慢させるための、あたたかな、使い捨てカイロ、安価なウォッカに墮す可能性もある。

親切は、ささやかで「小さな親切」である。これは、謙譲の表現には留まらない。本当に「小さい」のである。大局的根源的なことについては、親切心は関与しない。ささやかな親切は、傍観者にとどまり、家族のうちにははいりこまず、自己の使命となるような枢要事、負担の大きいことには関与しない。わずかに、自分の余裕分のみを贈与するにすぎない。この限界は、よくよく心得ておく必要がある。

親切は、ささいで卑小である。しかし、利他・慈愛の精神に発している親切なら、おのれを停止し、大局的根源的な人間愛の発揮に道をゆずることはできるし、そこへと自己否定的に転進することもできる。親切は、小さい。なくても、よい。料理につかう塩のようなものである。料理自体にとって代わることはできないし、多すぎてもいけない。しかし、食をすすめ、それが料理を引き立て、何倍もおいしくする。そして、ときに、それが決定的な役割をはたすこともある。

(第三章は、本論文集が初出になる)

第四章 親切の本質―たまたまにする、ささやかな手助け―

1. 無償のボランティア的な贈与

親切は、お金をとらない。お金をあとで請求すると、「なんだ、親切でやってくれたのではなかったのか、商売だったのか」と失望する。親切は、その相手に対して、慈しみの心をもって、ささやかだが、無償の手助け・贈与をするものである。

われわれ（日本）の親切は、英語の kindness 等とちがって、家族にするものではなく、他人を前にその困っていることを解消し、求めているものを満たす行為であり、価値ある働きや物をこの他人に与え移譲することである。そういう他人への価値の移譲は、この資本制社会では、それと同価値のものの交換という有償の売買になるのだが、親切は、これを無償とし、贈与する。

だが、その贈与は、ほんのささやかなものに限定される。「親切な薬屋さん」は、「慈悲深い薬屋さん」とちがい、薬代は取る。他人同士であることをふまえ商品社会の原則は貫きつつ、それの外で、あるいは、その余裕の部分で、ささやかに好意的にふるまうのである。

「不親切な薬屋さん」が売買行為のみに留まり、たんに薬をわたし薬代をとって終わるのに対して、「親切な薬屋さん」は、それ以上のところで、商売を終えて余剰のところ、お客の困っていること、陰に陽に求めていることに対して、これを思いやり察して好意的に無料で相談にのったり、サンプルをもってささやかな贈与をする。商品の値段を安くしてくれても、親切とはいわない。ふつう商売の外で親切はいう。

（ごくささやかなボランティア）無償の親切は、ささやかなボランティアである。ただ、ボランティアと違い、労働と見なされるほどの多くの時間や骨折りはしない。行きずりのその場で臨機にするほんのささいな手助けが、親切の奉仕であろう。仕事・勤労といわれるような、多くの時間をさいての献身は、親切を超えたものになり、「ボランティア」とか、「奉仕活動」といわれるものになる。だが、その利他の精神は、同じであろう。

ときには、ボランティアもわずかな時間で終了することがあるから、親切と時間的には、変わらないこともある。だが、そういう場合でも、区別がある。ボランティアは、計画的であり、あらかじめそのつもりで準備して仕事の合間を見つけてこれを開始する。これに対して、親切は、かりにボランティアと同じぐらい時間が費やされる結果になったとしても、それは、あくまでも、たまたまの出会いにたまたま手が空いているので手助けするだけのものである。

一般的にいえば、有給・有償の仕事をしながらも、その余剰・余裕の部分で無償のささやかな手助け・贈与のできるのが、親切で、この親切を、仕事そのものにまで広げて、つまり本来的には有償の仕事であるものを無給・無償とするのが奉仕活動やボランティアだといえるであろうか。

ささやかで好意的な小さなボランティア的行為が親切で、自己を奉げるほどの大きな、腰をすえて取りくむような親切が、ボランティアになるのであろう。ボランティアでは、生活そのものを変えて、それを仕事とする。だが、親切では、生活はそのままであり、その生活の周辺に偶然的に些事として生じてくる他人の困りごとに、ささやかに即興的に応じるだけである。

親切は、通常、日々の生活の断片にするもので、その場で臨機に應じる直接的対応であるが、ボランティアは、そういう生活の諸断片のひとまとまりをなした、あらかじめ計画された行為の持続的な一全体をなす。

(親切は、金銭贈与もふくむ) ボランティアは、無償の労働の贈与であり、一般的な理解では、金銭や物の贈与は、ボランティアと区別して、寄付・献金といわれる。献金と献身のちがいである(寄付は、物やお金という、いうなら過去のまたは他人の労働の蓄積物を贈与するのであり、労働の贈与の特殊型とみなされなくもない。ボランティアを論じるひとの中には、ボランティアに献金・寄付を含めるひともある)。だが、親切は、両方をふくむ。ささいなことで、労働・献身というほどでもないし、寄付・献金というほどのものでもないのが、親切である。相手の求め、困っていることに応じるのが親切で、それが金銭であれば、金銭で親切にする。

その点、ボランティアは、親切とちがいで、自分の仕事をやめて多くの時間をそれにさき、単なる献金・寄付行為とちがいで、自己の存在そのものを、その無償労働の労働者にする。特筆すべきことがらとして、その献身は、いのちを奉げる決意をした「義勇兵(volunteer)」の名前をわけてもらっている。

2. 仕事のうちでも親切が言えるか

親切は、多くは仕事のそとでその余裕になされる。親切を自分の仕事にするひとはいないであろう。典型となる親切は、仕事のそとの余裕・余暇にする、ほんのささやかな無償の手助けである。

これに対しては、おそらく、「親切なお医者さんや親切な駅員さんは、その仕事・本務自体で親切なのではないか」といわれることであろう。余暇・余裕に親切にしているのではないと。

しかし、親切な車掌さんは、本務の検札に親切なのであろうか。優しい検札は、親切とはちがう。その親切は、例えば、本務ではない観光案内をする等、いわば、本務からいうと余計なこととしてなりたっているのではないか。親切は、業務外の余裕の部分なのではないか。

歯医者さんも、診療行為のそとの余分のところで親切なのではないか。虫歯の治療をしてもらいにいき、そこを治してくれることに関しては、「熱心」といい、「誠実」とか「優しい」ともいう。だが、「親切」とはいわないのではないか。親切は、その歯を治療するだけでなく、無料で、ささやかな時間を割いて、治療を求めたところ以外の個所を見て、まだ痛みもなにもないが、虫歯になりかかっているのを指摘してくれるときに、この余分の部分でいうのではないか。

(無償が親切だとすると…) 親切は、余裕・余暇に無償でささやかにするものである。それが原則なら、お金をとる仕事のそとで、その範囲外の延長部分に、無償で、ささやかな親切は、可能となっているのである。

親切な歯医者さんは、有償の治療のそとで、無償で、別の虫歯を親切に発見してくれたのであるが、それを治し始めて有料にするところでは、もう、親切とはいわないであろう。熱心にそこも治してくれたということになる。それでも、「親切に治療してくれた」というひとがいたとすると、それは、その軽い虫歯はお金をとらず無料で、無償でやってくれたということになるのではないか。

(親切も、やはり、仕事のうちか) 親切な八百屋さんが、大根の葉っぱが不要というひとには、無料でこれを切っけてあげて、そのごみとなる部分を引き取る場合、サービスとはいえ、お客を逃がさないためのことで、仕事のうちでの親切になりそうである。三時間コースの観光バスにのって、「あのバスガイドさんは、まっこと、親切じゃったのお」というとき、このガイドさんは、その三時間はまるまるかんずめで仕事であったのであり、その中で「親切」だったのである。

ボランティアは、無償であり、有償の仕事には、ボランティアはできない。親切も同様、無償が原則である。ただ、ささやかな時間と負担なので、仕事中でも親切はさしはさめる。しかし、その仕事での親切も、無償であり、これを明確に有償とする場合は、「親切」とはいえないであろう。休憩所でコーヒーを入れてくれたりして親切なバスガイドさんと思っていたのに、あとで、その親切分を別会計で請求されると、「なんじゃあ、親切でやってくれたんじゃあにゃあんかい?!」ということになる。

親切は、仕事のうちでも可能だが、それは、あくまでも無料・無償である。平均的な仕事のうえに、その濃いサービスに、労働なら、その平均的労働のうえに密度の濃い働きをするということとで、その濃い部分は無償であって、そこに親切の好意と贈与の精神が見出せるとき、それは、仕事のうちでの親切になるのであろう。あるいは、かりに親切にすることで、その本務がお留守になり、一時、停止したとしても、その親切によって、よい企業イメージを与え、よい宣伝効果を与えることになるのであれば、広い目でみれば、秀でた濃い仕事をしているのであり、「親切も仕事のうち」となりうるであろう。もちろん平均的労働を下まわった形で親切にこれを割いてなりたつ親切もありうる。雇用主には嫌われる「余計な親切」となる。

(ボランティアとちがひ、親切の余裕は誰でもがもっている) ボランティアできるひとは、相対的には、余暇・余裕という点で、恵まれているひとである。経済的にも恵まれているから、無償でひとのために献身できるのである。親切も、余裕・ひまがあって、無償であるのだが、その程度・その質が、まるでちがう。

極貧の者には、ボランティアはむずかしいが、親切なひとには、いくらでもなれる。万人が、親切のための余裕・暇はもっている。親切は、ささやかであり、ほんの瞬間の暇・余裕があるだけ

でも、その気持ちがあれば、これを実行できる。

駅で、交番をたずねられて、それに親切に応えるには、「ここを出て、左にまがると、すぐです」と、ものの5、6秒もあればよい。いな、それ以上の時間をかけた親切は、くどくなり深入りした余計な親切に墮す。親切は、ささやかで、さわやかに切り上げなくてはならない。だが、ボランティアとなると、時間的には少なくとも3600秒を超えなくては、やった気にもなれないのではないか。

(ボランティアと親切のはざま) ボランティアと親切は、重なることもある。家を「親切に補修してくれた」ともいうし、「無償でボランティアでやってくれた」ともいう。費やした時間は同じだとしても、その負担の感じ具合がちがって、する者にも、してもらう者にも、小さな負担でたまたまのことでささやかな気持ちですむ程度なら「親切」であろうか。計画的に取り組み、あるいは負担が大きいと感じられるなら、「ボランティア」となろう。同じように、無償で自発的に好意的に手助けするのだが、親切は、その心の方に重きをおいて好意的にということであり、ボランティアは、無償の労働という事実に着目しているのもあろう。

3. ささやかさ—子供にもできる

(親切は、本来的に「小さな親切」) 親切は、余裕に暇に無償でなされ、本務を妨げない程度にこれの外に付加して軽くなされる。負担が重いものは、親切の範囲を越えるものとなる。

親切は、見も知らずの他人にするものとしては、深入りは、相互にふさわしくない。余裕のありそうなひとに、わずかな時間をさいてもらい、ささやかなものの贈与を願うのが親切を請うことである。

十円硬貨が不足して困っているのを助けてもらうのが親切で、「一万円欲しいので下さい」というのは、親切を超えている。それは、寄付・献金か、恐喝に属する。小ささが親切には本来的である。

われわれの親切は、表面的なことに限定しての軽い接触である。その内面・内情に踏み込むことをしないようにと自制しあった関係である。

したがって、一方が濃い交わりに移行しようとしたときには、意外なことになる可能性がある。好意的な軽い親切な交わりでは、理想的だったのに、濃い親密な交わりになろうとしたとたん、相手は関係を一切拒否することになる場合がある。内面にふれず、うちに入らない親切関係だからこれを受け入れていただけだったということである。

あるいは、ささやかな負担ですんでいた親切とちがい、親密な間柄では、大きな負担を背負うことも必要になり、この負担には耐えられないということがでてくる。親切は、エゴイストでも、ごくささやかな利他だし、エゴを保護しつつ、外面・表面でのみ交わればよいので可能である。親切なひとは、かならずしも、慈悲心にあふれたひとであるとは限らない。親切は、表面的外面

的な交わりでしかない。そうしているのは、ぎすぎすした関係になるのは困る、不愉快な隣近所ということはいやだから、ということがある。したがって、一步内部に踏み込むと、冷たいひとで、無責任なひとということになる場合もある。

それは、親切にされる側でも同様で、深い関係になりそうだったら断ることがある。好意的に関わってくれるひとに対してはその親切を断るのは、好意を否定することになるので、仮にいやでも受け入れていく。だが、他者関係の浅い接触を超えて、つまりは親切を超えて踏み込んでこられたら、親密にはなりたくないことをはっきり示す必要がでてくる。

(貸し借りの意識をもたなくて済む程度のもの) 親切の贈与の量は、あとに貸し借りの意識をのこさない程度の、ほんのささいなものである。貸したのではなく、贈与したのである。借りたのではなく、もらったのである。その一方通行で、ことが終われるのが親切である。

もちろん、ひとは、他人に対するときの損得には厳格で冷たく、少しの贈与とはいえ自分の損であるから、これで終わりとの気持ちには簡単にはならない。そのことを親切にされるものも承知しているから、とくに恩着せがましい者からの親切は、できるだけこれを断るようにするものである。ふつうの者でも、その傾向はあるから、通常、ささいでも親切の贈与には、それに見合う感謝の好意的な気持を返す。

(子供にも出来るちいさなもの) 誠実とか真実の人になるには、信念のいることで、こどもには、困難なところがあるが、親切は、こどもにも十分にできる。余裕・ひまがある者で、ささいな負担ができれば可能で、結構こどもにも当てはまることもある。誠実や真実は、義務意識をもち裏表をつくるような人間の心の複雑さをふまえて成り立つ大人の道徳であって、子供には無理である。せいぜい子供には、思いやり、正直、素直がいえただけである。その点、親切は、ごく浅い単純なかかわりとして、こどもにも可能である。

大した配慮・思いやりの能力がなくても、困っているひとが自らに求めてきてくれることもあって、こどもも親切にする機会には恵まれている。ささいな親切なのだが、こどもは、日頃、役立たずなので、「親切じゃのお、おおけに！」のこぼれに感激してしまう。ひとに思いやりをもって生きることの喜びを体験する。

4. かならずしも頼りにはならない

「ひとの親切をあてにしてはいけない」という。親切は、ひとの余裕分の無償の贈与であり、これは、当人にその余裕・その贈与の意思がなくなったら、それで終わりである。一方的な好意だったのだから、義務でもなんでもなく、権利として要求できるようなものではない。あてにしてはならない。

また、その親切の中味・出来具合も、あまり、期待しすぎないようにした方がよい。好意の贈与であり、無償なのである。不出来だから、やり直せ、別のものをよこせという権利はない。

主観的には、親切なひとは、好意的に思いやりをもってやっているのであり、これは、買わなくてはいけない。「親切でやってくれたことなのだから、文句はいえない」とがまんしなくてはならない。ささいなことを親切には求めるべきで、無償の贈与に多くを期待する者は、ずうずうしいのである。

(親切なひとは、表面的で軽いこともある) 親切な人は、世話好きで軽々しく相手の表面的なことがらに関わるひとで、場合によると、外面的に体裁よく取り繕うだけのひとである可能性もある。自己の義務・責務について、じっくり腰を入れてという姿勢はかならずしも持たないということである。

人ざわりのよい親切な人の注意は、社交の表面的なところに向けられている。ひとがどう批評しようと大局を見失わず、責務を誠実にはたしていくという点では、あまりあてにはしない方がいいかもしれない。「親切だけれども、頼りにならない」ということが生じる。

逆に、「不親切だけれども、頼りになる」場合がある。親切の関わる表面的な、どうでもよいようなところには目もくれず不親切でぶっきらぼう・無骨であることは、肝心のところに責任をもとうとすることの裏面であるかも知れない。そういう場合、不親切な対応は、義務感の強さの表れで、真に対応すべきことに懸命という、誠実さを語るものになっている可能性がある。親切は、仕事外のことであり、誠実さは、仕事自体に求められるものである。

もちろん、表面は、内面を表すものでもあり、親切の外面は、誠実さの内面をあらわしたものであることもある。親切なひとは、つきあえば一層そのひとの思いやりが分かり誠実なひとであると知ることになる場合もある。不親切なひとは、表でそうであるのみでなく、内面もそうで、冷酷であったり不誠実なことも少なくない。外面は、ひとを表し、かつ偽るのである。表面的なものである親切は、付き合いやすすぐに分かる。だが、誠実さは、内面にふれるようなことに出会い肝心なことに関与するまで付き合いなくては分からないことがある。

5. 傍観的他者距離

われわれ（日本）の親切は、他人への親切であり、他者距離にあるものの交わりである。その距離を尊重し隔てを守りつつ、他者の自立性・独立行動をさまたげることなく、困っていたり、求めていることにささやかな手助けをしようというものである。

親切をする者は、その相手から不愉快な思いをさせられる場合、贈与の義務はないのだから、即、親切を停止できる。親切を受ける者も、他者同士であることをふまえていて、むやみな贈与は求めないし、見知らぬ他者であることを超えるような贈与は、ことわることにもなる。ただし、敵対や悪意の、反発的な他者距離ではなく、好意的な引き合う他者距離である。

嫌いな者がいたら、離れたところに席をとる。わが子は、ひざにだく。濃い愛をもっている者とは、一体的となる。しかし、親切は、そこまでになることはない。親切にしあう好意的な者は、

隣にすわる。うっすらと触れ合う好意の愛にとどまる。他人であり、独立して別の世界に存在する者であることを踏まえて、たまたまにとなりに接するのみである。そんなはじめてみる他人を抱いたりしてはいけない。

(行きずりの傍観者として) 誠実は、責務ある相手に対して、思いやり深く尽力する。誠実さの働く場面では、自己とその相手とは、たまたまに出会っているのではなく、契約関係を典型にして、しばしば必然的な権利義務的な関係をもっているのであり、相容れない厳しい対立関係にあったり、罪の誠実な償いのときのように甘えの許されない関係に立っている。それに比して、親切の場合、その相手は、不定の他者であり、親切を贈与することは、責務ではない。対等か優位の位置にたつて、かならずしもしなくてもよい贈与をするのが親切関係であり、純粋な親切は、たまたまに出会ったにすぎない気楽な行きずりの関係に成立する。

傍観者・観客にとどまるのが、親切の立場であり、たまたま舞台のそばにいたので、舞台から演技者に呼びかけられたために即興のささやかな手助けを引き受けようとしているのみである。誠実は、観客ではなく、舞台のうえに立ち、ことの展開の当事者として、責任をはたさねばならず逃れられない立場にいる。親切とちがい、けっこう家族の内でもいう。

(単なる「同情」の傍観者ともちがう) 同情も、あくまでも傍観者の位置からする。当事者にはならない。その点は、親切と同じである。同情する自分は、恵まれた優位の立場にあつて、受苦・受難者とは別であり、これを他者として突き放して見ている。親切も同じで、自分は贈与する優位の位置にいる。相手は困っている他者であり、これに他者としてかわり、傍観者・観客として向かい合う。

ただし、同情とちがい、親切は、かならず贈与的な行為をもつ。観客でありながら、その相手の舞台に即興で一場面のみだが参加して、お手伝いをする。同情は、受難・受苦のひとにするものとして、なぐさめ援助する契機をもち、贈与的なこともあるが、それは、付随的なことで、なくてもよい。相手の悲哀の「情」に「同」じく自己を向けてこれを理解するということがあればよい。親切は、だが、かならず、この贈与・手助けの契機をもたねばならない。それがあつてはじめて、親切である。

同情は、その相手をよく見ている、その受難の舞台をよく観察し、想像力をもって、しばしば当事者よりも深く物語を理解し、これになみだを寄せる。だが、親切は、一時、飛び入りで参加するにもかかわらず、前後の舞台はあまり見ていない。うわのそらであつたり居眠りしていることも多い。その困るにいたつた物語は、知らないでよいと思っている。それでいて、即興で参加までするのは、その舞台から呼びかけられたからである。「困っている」「手助けを願いたい」と、しばしば唐突に、親切へのよびかけがあるのである。

(自立独立の尊重) 今日、親切は、自立した者同士の他者距離を尊重していて、ほんの外面的で表面的な交わりにと限定されている。その独立を侵害することは、親切を超えて、厚かましいお

節介・干渉となる。町で交番を尋ねられたことに対して、親切は、それに限って応えるものである。それを踏み外して、「一緒にお茶でもいかがですか」と誘うのは、行き過ぎとなる。

親切は、独立的に行動している者の、その困っていることに限定して、ささやかな手助けをするのであり、その行動そのものに干渉・介入するものではない。この隔たりをふみはずした親切は、それが良いことだとしても越権であり、「なれなれしく、気持がわるい・・・」「厚かましい、お節介な！」と嫌われる。独立性を侵害し、差し出がましく、干渉的だと相手に感じられる手前にとどめ自制するのが、われわれの親切である。

(ボランティア、奉仕との他者距離のちがひ) 親切は、同情とちがひ、当の事柄の展開されている舞台から呼びかけられて一時的な即興の手助けをするのであるが、それは、その舞台の展開の本筋には関わらない。だが、ボランティアや奉仕は、その困っている他人の援助について、本格的に関わり、舞台の展開の本筋のなかに組み込まれていく。有償の本格的な仕事になるものを、無償とするのであって、その相手にとって肝心なことにかかわるのであり、それを予め自覚し計画的に参加していく。ただし、深く関与することがあるとしても、あくまでも他人として、客分において参加するのであって、他者距離という点においては、親切と同様であり、これを超えて踏み込むことは慎まねばならない。

6. 市民社会のふれあいの間柄

現代社会では、機械化自動化がサービス業でも進んで、人間同士が直接交わることは少なくなっている。圧倒的な社会的交わりのなか、自給自足の真反対にある生活にありながら、ひととひととが直接交わることは、むしろ、どんどん少なくなっている。本性的に社会的動物であるひとはこれを不満に思い、そのありたい交わりのひとつの有り方を「ふれあい」ということばに表現するようになっていく。親切は、人間同士のふれあいを実現するよい機会と捉えられる。

「触れ合い」は、現代の自立したもの同士の関係の一面を適格に語ることばである。現代社会は、自由で平等な独立した個人からなり、各人は、自分のことは自分で決定する。独立したもの同士として、独立国がそうであるように、市民社会の各個人は、その内面（内政）には、相互に立ち入らない。その内面については、相互は、無関係に留まりあうことを承認しあっている。市民同士の関係は、表面的なものに限定される。内面に入りこむことは遠慮しあう。その自立したモノト同士の関係が、ふれあいという特性をもつのである。

(触れあうのは、表面的な交わり) 「触れる」とは、その関わる対象・ひとに対して、その表面に接近し、その間にあった空間をゼロにして密着することである。かつ、それにとどめ、その表面から内部へと侵入していくことをせず、その表面において相互に相手の存在を確認できる程度に軽く密着することである。突いたり押したり殴ったりするのは、表面においてすることだが、その表面にとどまらず、内部に入りこんだり、本体に圧力・衝撃を与えることであって、それは、

触れることを越えたものになる。触れるのは、その密着した対象の存在を相互に感じるだけにとどめる軽い接触になる（ものの表面ではなく、内的本質について「核心にふれる」というようなことはあるが、それも、やはり、核心の表面にそっと触れるということであろう）。

同様の接触をするものに「さわる」という有り方がある。これも、触れるのであるが、意志してその対象に接触し密着することをさす。だが、「ふれる」のは、意志することを含むがこれに限定されず、密着すること一般をさす。人間関係のふれあいということでは、「さわる」とは言いわない。「さわる」とは、何より感覚的な直接性に留まる場面でいい、そうでない場合も故意に接触して相手の尊厳をそこなう干渉となるような「気にさわる」否定的な接触にいうことが多い。市民社会の直接的な、望ましい人間的接触を指すのは、「ふれあい」となる。

「ふれあい」は、「触れる」だけではなく、触れ「合う」のである。相互が偶然に出会うということである。「ふれあい広場」とか「ふれあいの里」といった名を聞く。筆者の近くには「ふれあい」云々（有料）老人ホームというのもある。決められた相手との必然的な交わりがあるのではなく、見も知らずの人たちが、つまり、近代社会の自立した市民たちが、いれかわりたちかわり相互にたまたまに出会うことが前提されている「ふれあい」の場である。「ふれあいアパート」「ふれあいマンション」というのは聞かないが（探せばどこかにあるとは思うが）、おそらく、これはこれで、定住すべきなのにこの名ではそれに反して、軽すぎるのであろう（それと、自立した個人・家族が住むには「ふれあい」は、干渉し合う感じがして現代人にはあわないのもあろう）。その点「ふれあい（有料）老人ホーム」は言い得て妙である。入れ替わり立ちかわりで商売繁盛ということがあり、老人を送りこんだ家族も、知らない老人同士にはふれあい以上の濃いつきあいをしてもらいたくはないと思っていることもある。「袖ふれあうも云々」というが、市民社会でふれあうのは、偶然な出会いになることが多い。親切は、たまたまに困ったひとが、たまたま、そこにいる行きずりの他人にこれを乞う。ふれあうのである。

もちろん、外面的などうでもよいささやかな手助けが親切であり、ふれあいは、この肝心の点において一致する。親切は、単に表面にとどめ、内的な干渉になるようなことにまで深入りをしてはいけないのである。ふれあいも、そのひとの根本にかかわるようなことには関与しないものである。ごく表面的な、いうならどうでもいいような没目的な「おしゃべり」「ひまつぶし」「気晴らし」程度のことにとどめられる。

（それでも**直接に人と人がふれあう**）かつ、それでいて、あたたかいのが親切や、ふれあいである。触れ合うものは、感覚的にあたたかさを感じることになる。体温を直接感じることはない。表面にその存在を感じる程度に留めるのがふれあいであり、ほんのりあたたかく温血動物であることを感じあって安らぐのである。親切も同様である。些細な手助けに限定するのが親切である。負担になるようなものは、親切を越えたものになってしまう。冷たい打算の拝金主義の資本制社会で、これを越えて、親切は、こまっている者に、贈与する。見も知らずの行きずりの他人

に贈与するのであり、ふれあって、あたたかい。弱肉強食の殺伐とした資本制社会にあつて、親切には、これを否定する人間の生身でのやさしいふれあいがあり、おだやかに生きる温血動物でもあることを思い起こさせるひとときがある。

ひとは、自立者として自己決定して一人で生きる。だが、他方では、ひとりでは生きられず、欲望も多彩で本源的に非自立の社会的存在でもある。無数の交わりのなかに生きている。だが、行き交うものは、その欲望・目的等の多彩さゆえに、そばにいながら、匿名の通行人にとどまりあう。電車やバスでは相互にしばしば密着して身体は触れあっているのに、こころは、相互に無になりあい無視し合う。となりの乗客と一言も交わすことなく携帯電話を片手に遠方のひとと話し、あるいはもくもくとメールを打つ。人体はふれても、人格は触れあうことがない。親切は、そんな行きずりの人と人とを結びつける奇遇の「ふれあい」の場をつくる。

7. 好意のふるまい

親切は、好意的であるにとどめられる。好意は、親密に愛するものではない。好意は、相手を好ましく思い、相手のためにと贈与的であるが、愛のように一体化を求めるものではない。あくまでも、他者として表面的にふれあうにとどめ、そばに一緒にいることを求める程度を限度とする、ささやかな親しみあいである。親切は、そういう好意にとどめられる。

見知らぬ他人との他者距離を維持し、独立を尊重して干渉しない親切の間柄には、そばにすることを求めるのみのささやかな好意がふさわしい。

愛は、一体化の欲求であるが、好意は、愛の候補となりうるものを選択する段階に留まる。好意自体においては、まだ、「ともに生きる」つもりはない。そばに寄せたいのみである。深入りするつもりはなく、ごく軽い接触に限定される。嫌ではない、気に入る好感をいただき、引き寄せたいと選好しているのである。同席する程度に軽く一体化を求めているのであり、贈与が必要なら、軽く贈与的になり、受容が可能なら、好んでこれを受け入れることになる。

その接近は、愛とちがひ、限度をもつ。合体のつもりはない。表面的接触に限定し、濃い愛へと深まることは自制している。姉の夫に、妹は、好意をもってよい。だが、姉が死ぬまでは、愛してはならない。好意をいただいていた級友は、思い起こせば、男女を問わず、おおぜいいることであろう。好意は、異性愛の候補を含むが、その愛の引力圏には入っていない。その引き返せる点を知っていて、これを超えない。

好意は、引き付けられ近づく面と、その限度を超えないようにと自制する面をもつ。近所との付き合いでは、近づきすぎないようにとこころがけることが必要であろう。親切と同じで、深入りしないようにと感情的に自制することがある。

「慕う」「親しい間柄」は、好意以上であり、したしく、離れがたく思い、こころの隔たりがない、気心がかよう身近な間柄である。友情とか師弟愛などの多くは、これであろう。ここでは、

親切にし合う他者距離を超えることが多くなる。負担のあることも厭わないし、内情にもふみこんでいくのであり、ささやかな外面的な接触にはとどまらない。

(相手にも好意感情を生じる) 親切にする者が好意をいだくのであるが、それは、親切にされる側にも抱かれることになる。無償の手助けをしてくれる思いやりある親切なひとには、「好ましいひと」との感情をもち、そばにいたることをこころよく思い、好意的になっていく。

好意は、好意を呼び起こし、親切は、親切をこだまする。隣近所は、一方のみの親切ではじまる。それで、すぐに相互に好意的で親切にしあう好ましい関係の和やかな「和」が形成される。

親切は、する者には、ささやかで負担はすくない。だが、贈与の量はささやかであっても、親切の好意は、その相手を好ましいものと評価してのことで、これには、自分も好意で応えねばという意識をもって、お返しを考えてしまう。

他人同士は、冷たく打算的であるのが、われわれの資本制社会である。家族内なら、無償は当たり前だが、他人とのあいだの無償の贈与は、この商品社会には異例であり、親切は、たぐいまれな好意として、過敏なひとにおいては、ありがたい無担保での借金のようなものと意識される。

(等価ずきな人類) 隣近所の親切は、相互性がむしろはじめからの目的である。ぎすぎすした関係はいやだから、隣とはおだやかにしたい。それには、親切は、距離をもちつつ好意的であって、好都合な交わり方となる。町の暴力団も、近所付き合いでは意外にも親切で好意的になることがあるのは、このあたりの機微による。親切は、反悪意・反敵意の「微笑み」表現でもある。

人間は、どこからそういう心性をもつようになっていくのか定かでないが、等価交換・因果応報を好む。等しいものに等しいものを、借り・仕打ちにはお返しを、「目には目を」という正義、つまり良い意味でも悪い意味でも報復律 (lex talionis) をこの世の大原理というか、根本願望としている。

ハッピーエンディングの物語は、現実とちがひ、必ず、その前に不幸・苦難をもっている。あるいは、現実の不運の受難者には、溺れる犬に石を投げつけるように「因果応報というから、前世でよほどあくどいことをしたのだらう」とあらぬ罪をでっち上げ等価のつじつま合わせをして、つばをはきかける。

親切にしてもらったら、そのひとに好意をいだき、そのお返しをと思う。親切なひとには、等価の交換をもって親切で応えようとする。好意は好意を、親切は親切を生んでいくことになる。

意地悪な、迷惑なひとには、そのひとの「礼儀」にあわせて、こちらも、等しく、意地悪に对应したくなる。われわれのこの礼儀正しさには、同じ人としての鸚鵡返し・まねること以上のものがあって、相手が犬であっても、ほえついたら蹴飛ばしたくなる。なかには、小石にけつまづいても、この小石に報復しようとする元気な人さえいる。報復律 (lex talionis) は、作用には均しい反作用のある自然法則 (lex naturalis 自然法) の感がある。本来、親切は、たまたまに出会って一方的にするもので、貸し借りはなしで済ませられる軽いものに限定されている。それでも、

親切にされたら、そのお返しを思い、せめて感謝の気持ちをと好意をかえさずにはおれないし、親切にした方も、こころのどこかにそれを期待しており、親切ぐらいのことも結構忘れないものである。

(**人類的好意へ**) 疎遠な集団同士は、警戒し敵意をもつ傾向にある。動物ではまずそれが普通である。ひとも古くさかのぼればのぼるほど、狭い共同体的交わりのそとでは、敵意をもって接していた。子供も食料も女性にまかせてすることのない男性たちは、近隣の共同体との戦いに生きがいを見出していた。親切などそういうところでは、とんでもないことであつたらう。

だが、ひとは、いまや、同じ共同体や市民社会のうちのみならず、地球規模の人類共同体において、親切にしあうことが可能である。人であれば誰でもが親切の対象になる。敵意をもってではなく、好意をもって交われるようになってきている。親切を自分の仕事にまで拡大した無償・博愛のボランティアは、人類への愛であり、難儀をしている者があれば、地の果てにまで駆けつけていく。

「どなたかは存じませんが、ご親切にしてください・・」と、相互に見知らぬ人が、好意的に交われるのが、親切のあり方だろうが、それが、民族紛争などの続く特殊な場所以外では、いまやどこでも可能になっている。自立・独立の精神を相互に承認しつつ、困ったところをささやかに助け合う親切は、これからしばらくの人類にふさわしい交わりの形式となるのであろう。

8. 純粋な親切は、行きずりの人、通りがかりの人にするもの

純粋な親切は、行きずりの人が、たまたまに通りがかった見知らぬ人に、ささやかな手助けを願うものである。たまたまの行きずりのひとの困ったり求めのあることに好意的に応えてするささやかな贈与が親切である。見知らぬものにする親切は、いうまでもなく偶然的出会いになる。周知したものの間でも、親切をすることになる多くの事柄は、偶然的である。

だが、親切の種はいたるところに見出せ、「一日一善」というと、だれでも365日出会えるものとしては、親切ということになる。

必ず困ることになるものならば、あらかじめ備える。それが自立者である。たまたまに困っている者に出会ってなされるのが親切となる。したがって、世話好きなひとは、広く周囲を見渡していて、これを探し出すことが必要になる。しかも、この困惑ですらも、しばしば隠して自分で処置しようとするから、世話好きは大変である。

ただし、自立的な個人からなる現代の市民社会でも完全に独立してできることは限られており、他人を頼りにしなくてはならないことも多い。また、こどもなど社会に大きく依存して生きる者も少なくない。世話好きは、そういうひとのところへ行って、待っておれば、なんらかの困窮や求めをいずれ見つけられ、世話好きの心性の満足をえることができる。

(**忙しいと、親切は後回しに**) 親切にする者がその相手と偶然にしか出会わないのみではない。

逆に困っている者も、親切には、偶然にしか出会えないのでもある。

親切なひとは、そとの人であり、見知らぬひとであれば、出会いは、偶然的である。親切にしようとして待ち構えていてくれるわけではない。あるいは、かかりつけの親切な歯医者さんのように親切の相手が決まっても、親切は、有料の仕事のそとのことだから、無償の親切をしてもらえる保障はない。日頃親切だとしても、多忙とか自分の虫歯が疼いていて虫の居所が変わるければ、有料の診療は誠実にやってくれても、親切は、期待できない。

親切にしようとして日頃から心がけているひとでも、困っているひとに出会ったとき、たまたま余裕・ひまがないということもある。手がふさがっている場合は、親切の手助けはできない。

(しかし、いたるところにある) ひとは、自立者であっても、たまたまの困ったことに必ず出会うし、機に応じてささいで多様な求めをつぎつぎと思いつく。したがって、親切にする気があれば、親切の機会には必ず出会える。

「一日一善」というと、まず思い浮かぶのが「親切」であろう。勇気とか正義などとは、最近はその簡単に出会えるものではない。正義を振りかざすことなど、親切のお節介以上に、みんなから嫌われることもあり、「一善」は、それらを目指していたのでは、すぐ挫折する。しかし、親切なら、365日、周囲をみまわせばどこかにその種を見つけることができ、「一善」を続けることができる。おそらく親切のたねは、そこにひとがいるかぎり尽きることはない。

親切は、その心性において、好意をもっている。相手のことを好ましく思い、これのためになることをしてあげたいと意思する好意の気持ちをもつ。親切にするには、ひまや余裕が必要だが、好意そのものは、それがなくても示せる。親切心は、好意として、いつでもどこでも表明できる。

義務としての仕事のなかでも、好意的に仕事をすすめられるし、親切にするときのみか、親切にされるときも、好意的に反応することができる。

余計なお世話とみなされるときでも、その世話の、その好意は、余計ではない。余計な親切を断るとき、「ご好意は、ありがたいのですが」とか「ご好意だけをいただいておきます」という。みんなが親切な場合、そのうちのひとりか少数からしか親切をもらうことはできないが、その好意自体はみんなからもらえる。それでみんなが親切だったということにもなる。

親切は、偶然的な形でしか達成されないことがあるとしても、そのもとにある好意という親切心は、常に、仕事であれ、余暇においてであれ、かかわる全ての人に意義あるものとして受けとめられる。英語の親切(kindness)は、好意(kindness)とひとつである。

(たまたまに親切を請われる重み) 親切は、ささやかではあれ手助けの行為である。ひとの行為・存在は、重く、その思いをしぼる。元暴走族も、警官になったら、暴走を否定するようになる。僧侶の衣をきたら、ころまでが僧侶らしくなってしまう。声をかけられてたまたまにした親切でも、自分の親切な行為だったのであり、「親切な優しいひと！」という目で見られれば、ころまでがそうならざるをえなくなる。一時ではあれ、好意的で利他的な思いやりあるひととなる。

親切に (kindly) したら、優しく (kindly) なる。

悪魔のような者でも、たまたまに声をかけられ反射的に無心に親切をしてしまうことがある。一瞬、思わず、悪魔は、天使になってしまったのである。見も知らずの他人が、親切を乞うというかたちで、我利我利のエゴイストをして思いもかけず、利他の親切なひとにしてしまう。「小さな親切」は、される者に、しばしば、大きなひとの好意だが、する者にとっても、ときには、うちに惰眠をむさぼっている仏・菩薩を目覚めさせてくれる、ありがたい誘いになっているのである。

(第四章は、本論文集が初出になる)